剣と魔法とやっぱり剣

俺＜ー＞貴方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣と魔法とやっぱり剣

【Ｎコード】
Ｎ８６７５Ｓ

【作者名】
俺＜＝＞貴方

【あらすじ】
やっぱ、テンプレって良くあるよね。
書きたかっただけなんだ・・・ッ！

第一話：学園の不思議

七不思議って、あったりするよね

場所は会社だったり、学校だったり、マンションとかにはあるかな？

まあ、学校が一番ポピュラーだよね

僕達の学校にも七不思議ってのはあるけど、明らかに周りと違うのが、パズルの不思議

僕達の学校には、パズルが各教室に一つ、置いてあって、これがまた凄く難しいんだ

ただ真っ白な石で出来たピースが、何枚もある

これが、解ける事を想定されずに造ってあるみたいで、学校が始まって以来、解けてない

そんなパズルが、解けた時、そいつは神隠しに遭っちまう

何処の愉快な馬鹿が言いはじめたかは知らないが、これが僕達の学校オリジナルの七不思議

長々とお前は一体何を話して居るかって？

そしてお前は一体誰だって？

まず、僕はジュン、高校二年生

話はそれるんだけど、いや、一応繋がってるかな？

偽名ってカッコイイよね

普通、犯罪者とかバレたくない人が使うけど、ファンタジーの世界だと勇者様とか主人公が使うよね

めちゃくちゃ強い剣士とか、あるいは魔王とか魔法使いとか

漫画の読みすぎだよね、お前、魔王だったのか！って

・・・うん、そろそろ現実から目を背けるのは止めよう

今、僕の目の前にあるのは、落書きだらけの黒板、チョークの粉だらけの溝、黒板消し、煩い掲示物だらけの掲示板、落書きだらけの机や微妙に固い椅子でもない

でっかい岩に、湿ってる芝、何より夕暮れの空

太陽は一つ、だけど月は二つ、片方は紫

・・・で、一体此処は何処なんだ？

第二話：そんなに甘い現実じゃない（前書き）

予想以上に難しい、ちょっとプロット見直すかなぁ

第二話：そんなに甘い現実じゃない

少し湿ってるって事は先日、雨が降ったんだろうか

芝に水滴がキラキラ光っている

あれから、日もすっかり落ちて、夜になってしまった

今までの現実に無い二つの月の内、大きい方の月が紅く染まっていて、なんだか恐ろしい

だけど、今何をすれば良いのか解ら無くて、ただ徒に時間が過ぎていくのが虚しい

不気味な月は顔を見上げただけですぐに見付けられる

夜空には星が沢山瞬いていて、凄く感動した

ただ、周りに建物は見えない

町や村のある方角も解らない

「あ～あ、漫画とかならヒロインが上から降ってくるのになぁ・・・」

しかし、いくら夜空を見上げてもヒロインなんぞ降ってきやしなかった

夜空にあるのは、まさに降って来そうな星だけ

そんな星の中で、一際輝く星が目に止まる

だからとりあえず、その星に向かって行く事にした

ザク、ザク

辺りには影が無い

月明かりの中、ただ足音のみが響き渡る

ザク、ザク・・・

足音は、唐突に止まった

静寂に満ちた草原

虫の鳴き声も草が風になびく音も聞こえない

しかし、ただ一つ、音が響き渡った

大地の細かく揺れる音

地震の様な大きな揺れなどではなく、水中に流した超音波の様な揺れ

やがて、揺れがおさまり、足音は駆け出した

一番近くの獲物に向かって

「風が・・・止んだ？」

いきなり、音を供給していた風が止まった

「・・・雨でも降るのか？」

静寂に満ちた草原、月明かりが紅く照らす

「雲は・・・無いな」

夜空を星が無秩序に彩る

「向こうなら動画サイトにでも上げれば伸びそうな感じだけどなー」

その時、月明かりに照らされている草原を、しっかりと踏み締める音が聞こえた

「・・・近付いて来る？」

出来の悪いホラーの様な、足音だけが淡々と近付いて来る

「・・・止まった？」

足音は急に聞こえなくなった

「・・・多分、幻聴か何かだったんだろうなぁ」

よし、そうと決まったらとりあえず進むぞー！と、右腕を天に突き出した時、右腕が何かに触れた

「はぁ？」

一瞬遅れて、後ろで音がする

恐る恐る背後を振り返ると、そこには燕尾服を着た鎌を持った死神が、月明かりを背後に、鎌を振り上げていた

止まったんじゃない、飛んだんだ

ジュンがその簡単な事実を理解すると同時に、死神の鎌が首を刈りに襲い掛かる

「うわぁぁぁっ！」

しかし、ジュンがへたりこむ事で、死神の鎌は空を切り、地面に突き刺さった

そして、ジュンの体は死神から逃げ出す事を選択した

死神から背を向け、一目散に駆け出す

しかし、死神もまた、ジュンの首を逃す事はしなかった

恐らくは多くの血を吸ったのだろう、反り返った鎌は赤黒く錆びていて、切れ味はかなり悪そうだった

その鎌をまるで円盤の様にジュンに向かって投げ付ける

そして、ジュンの膝から下は、綺麗に無くなった

ゆっくりと死神はジュンに近付く

「ひ・・・ひっ、ひぃぁ」

腕のみの力で後ろに下がるが、煩わしく思ったのだろう、死神に両腕を切り飛ばされた

「ギャァァァア！？」

支えを失った事で後ろにぶざまに転倒してしまう

後頭部をしたたかに打ち付けた事で意識が一瞬吹っ飛んだ

目の前に景色が戻った時、死神の赤い目が、あの紅い月と同じ位大きく映っていた

死神の手には、何故か鎌が握られていなかった

徐に顔をわしづかみにされる

優しく包み込む様に頭を抱えられたが、頭を振り払う事は既に出来無かった

そうさ、これから何をされるか位分かっているさ

だから、せめてもの抵抗に

「ペッ！」

唾を吐く位は良いだろう

そして、目の前の死神は予想通り口を開いた

あぁ、そうだ、やっぱり俺は、食べられるのだ

血を失う事で、飛びかけている意識の残りカスが、頭に歯を立てられるのを確認した時、僕の意識は、命は失われた

辺りは静寂、ただ、血を啜り、肉を食いちぎり、脳髄を飲み込み、骨をかみ砕く音が響き渡る

死神の服が、血とジュンの体液でビショビショに成った時、辺りに新しい音が響き渡る

「ゴーストバスターでぇぇす！お仕事に来ましたぁ！」

月の光りを遮り、死神の意識をジュンから一瞬遠ざけると同時、両腕に抱えていた大剣を振り下ろす

一閃、ただ一閃で事足りた

たったの一閃で死神の頭から一直線に死神は切り裂かれ、断末魔の奇声を上げ、その体を砂塵に変えた

「うげ、既にスプラッターかよ・・・」

辺りに飛び散る血と体液、そして内臓や人肉

しかし、そんな中、キラリと光る何かがあった

「魂は残ってるのか・・・」

ジュンの魂、一日目で死んだジュンの魂は、結晶となって残っていた

「少し、輪廻転成の禁を破る事にしますか」

言葉を紡ぎ、詞に変える

そして、光る棒を創り上げると、棒の先で魂の結晶を突き砕いた

「次に生まれたらもっと上手くやれよ、少年？少女？まぁ良いや」

やがて男は去って行った、名前も何も知らない、ジュンの墓を残して

第二話：そんなに甘い現実じゃない（後書き）

臓物エンド

いきなり主人公が喰われるのも中々無いと思う

第三話：目を覚ますと・・・（前書き）

風邪にやられてました。

ってか今もぶっちゃけ風邪です。

第三話：目を覚ますと・・・

ねっとりと唾液の線を走らせ、目の前で口が開いた

細い舌は咥内でうねうね動き回り、巨大なミミズの様に見えた

右側の視界が消え、激痛に視界が揺らぐ

左側の目で見る世界は、ただ土気色の顔しか存在しなかった

血が滴る感覚がわかる、肉を噛み潰す音、咀嚼する音も聞こえる

恐怖って、一回りすると消えるんだな、なんてありきたりな事を考えた時、急に片側の音が無くなった

ああ、鼓膜も喰われたんだな、と何故か素直に事実を受け入れる事が出来た

ああ、せめて、そのまま頭にいってくれないか、脳さえ無くなれば、そのまま死ねるのに

そんなに上手くは行かないよな、パンとか食うみたいに、ある程度真ん中まで食うよな

・・・ああ、左の視界も消えたよ、失明した人達って、本当不便だよなぁ

痛みって、ある程度過ぎると消えるって本当だったんだな、喰われる感覚はあっても、もう痛く無いや

・・・今引きずり出されたのは、ど・・・の、ない・・・ぞ・・・

『・・・』

『また、可哀相な子供か』

『結晶まで出てしまったか』

『中々、聡い子供だったのになぁ・・・』

『しかし、死神に遭ったのは特別、運が悪い巡りだったみたいだな』

『だって、ほら』

『今から生まれる子は、元々、魂は入らない子だったから』

『空いてる器があって良かったな、少年』

『次は、天寿を全うするように』

視界が開ける、いや、真っ白な光がこっちに来る・・・？

まて、何で光を感じる？

いや、そもそも俺は何だ？

俺？俺って何？

わからない

わからない

『・・・もう、三年も経ったし、そろそろ起こしてもいいんじゃ無いかな』

『こっちの生活の基本も覚えただろう』

『名前は、少し違うけど、まぁ何とか折り合いは付けるだろ』

『じゃあ・・・』

『お早う』

「お早う、ショウちゃん！」

誰だ？いや、俺か、そういやそんな名前だったな

俺？僕？

・・・ああ、そうか

俺、喰われたんだった

今は、ショウって言うんだったな、ジュンもなかなか気に入った名前だったのに

どうやらこの世界は剣と魔法の世界らしい

正直、前喰われた時には何も分からなかったが、とりあえず最低限の事は覚えた

通貨は驚いた事に、円が使われていた

しかし記号で書くと¥ではなく、ただの〇な所がちょっとだけの違いだった

もう一つ驚く事に、一家に一台車ではなく、一本の剣が常備らしい

やはりこういうあからさまな異世界って感じがする所は好きだ

後、魔物って概念は無く、ドラゴンとかですら、現実世界の熊や蛇、狸とかみたいな扱いだった

おかげで、魔物！っていう感覚と、あぁ、な～んだって感覚がしてちょっと戸惑っている

朝ごはんにも豚や鳥肉みたいな感じで出て来る辺り、家畜としても飼われているんだろう

後、家庭によって違うのか、食事を取るときに挨拶があるかどうか微妙なラインらしい

俺の家は挨拶をするので、そこは唯一ホッと出来た

やはり、二つ常識があるのは感覚がかなり狂ってくる

何しろ自衛手段が真剣等の刃物で、そこらで遊んでいる子供達ですら、膝の辺りにナイフをぶら下げてある

向こうでの字の読み書き等と同じ位、刃物の扱いは常識らしい

後一つ、向こうとびっくりするくらい違う所があった

それは

「お早う、ショウ君」

「お早う、サラ」

現在１３歳、どうやら俺には、前の人生には無い幼なじみとやらが居るようだ

彼女はサラ、サラ＝ランパードという、ミドルネーム無しの名前だった

どうやら、この世界にはミドルネームを貰うにはある程度国に貢献しなければならないらしい

因みに、俺の住んでる、緑の多い田舎の村には、ミドルネーム持ちなど居なかった

閑話休題、そんな彼女だが、日本人離れした金髪と青い目（鏡を見て、俺もそんな感じで、思わずガッツポーズをとった）のそばかす少女なのだが、最近ニキビに悩んでるらしい

胸の方は、母親を見る限り、心配無用の様だ

どうしても隣人関係の濃くなってしまう、田舎に住む少年少女達も、街に住む隣人だらけで関係の薄い少年少女達も皆、１６になれば学生にランクアップする

大体皆、学校を夢見て既に読み書き計算は出来る様になってしまっている

つまり、学校で習うのはほとんど剣術や体術、それから一生を左右する魔法がメインだ

魔法は、読み書き計算や剣術、体術等と違い、学校で儀式をしなければ何も使え無いらしい

試しに、母親や父親の言葉を真似しても使え無かった

もう既に充分異世界ライフが日常になりかけてる俺に、異世界を思わせる通過儀礼が待ち受けていた

「ショウちゃん、貴方の武器を造りに行くわよ。」

第三話：目を覚ますと・・・（後書き）

とりあえず長くなるので、一旦投稿。

次はかなり長くなる予定。

第四話：マイ武器！（前書き）

あれ、長くする筈だったのになー

第四話：マイ武器！

一口に武器と言っても、かなりの種類がある

剣、というカテゴリの中でも、突き詰めればかなりの種類が存在する

短剣、所謂ナイフやダガー、片手剣、両手剣、直刃剣に大剣

大まかな剣の種類だけでこんなにある

突き詰めればほとんど無数にある武器の種類の中で、これから生涯を通して、相棒となる武器を造りに来ている訳だ

そんな、俺の人生を左右する店が、このランドルフ武器総合店

近くの町、と言っても馬車で三時間位掛かるんだが

まぁ、それなりに交易のあるこの町なら、武器の種類にもあまり困らない

因みに、俺達の通う予定の学校も、ここにある

教育の進んだこの町にあるランドルフ武器総合店は、大通りに面する一等地に建っている

店の主人に、十三歳の証明書をだせば、一度だけただで武器を見繕ってくれる

総合店、と名乗るだけあって、武器の種類には事欠かなかった

もちろん、特種過ぎる武器（例えば刀とか）は置いて無いのだが

店主のランドルフさんも、一等地に店を構え続ける要因の一つだろう

頭にタオルを巻き、油で黒く汚れたエプロンは、手入れを怠らない証だろう

自身の顔も黒く汚れているが、それを気にさせない笑顔がある

また、武器に相当通じているのだろう、手の平にはタコがたくさん出来ていた

そんなランドルフさんの悩みは、奥さんの居ない事らしい

今年で２５と、まだまだ若いのだが、朝早くから深夜まで開いているこの店とランドルフさんを支えるのはかなり難しいだろう

そんな訳で、ランドルフさんには嫁さんが居ないのである

閑話休題、とりあえず俺は、今まで使っていた短剣を手に取ってみた

右手、左手、逆手に持ち変え、繰り返し

空気を切る音が聞こえるが、どうも違和感が拭えない

次は片手剣辺りを試してみるか、と思って手を伸ばすと、横からひょいっと腕が伸びてきて、先に取られてしまった

服の材質から見るに、貴族、と迄はいかなくとも、それなりに上の人物だろう。

髪は綺麗に整えられ、盾を持とうとしてる手にはマメが余り出来ていなかった

「へっへっへ〜！一度使って見たかったんだー！」

そう言って少年は、剣を闇雲に振り回し始めた

「よっ！ほっ！はぁ！・・・何か違うなぁ！？」

あれ？と首を傾げながら片手剣を置こうとした少年は、俺を見て、ぱぁっと目を輝かせた

「なぁなぁ、今から盾も使ってみたいからさ、そこの木製の武器で攻撃してくれよ！」

そう言われたら何も言えないじゃないか、と適当に武器を手に取り、構えた

「よっしゃ来いよ！」

と、少年は盾を体の前に膝を曲げて構える

大上段から、鍬を振り下ろす感覚で、武器を振り下ろすと、あろう事か、片手剣の盾で真っ向から受け止めた

「「いっってぇぇぇ！」」

「ふざけんな！片手剣の盾は受け流す為にあるんだから、真っ向から受け止めんなよ！」

そう、そもそも基本盾というのは、受け流す為にあるもので、真っ向から受けてたら直ぐに粉々に砕けてしまう

真っ向から受ける盾は、所謂ビッグシールドという物だ

どうやら、この少年はその事を知らなかったらしく、目を白黒させていた

「へぇ〜、そうなのか、ゴメンな」

と、盾を元在った場所に置き、お詫びの記だろうか、だされた右手の握り、正直驚いた

彼は、数ある武器の中で、限られた位置にある、受け止める為の盾を持つ、槍の使い手だったのだ

握った手の平の、柄が擦れる部分のみが、皮が剥けまくってカチコチになっていた

「そうか、お前、槍使いだったのか」

「おう！俺の家は伝統的に槍を使わされまくるんだ！だから一回剣類を使ってみたかったんだ！」

彼の言い分も確かだろう、一つの事をやり続けるのは嫌になる

「でもダメだなぁ、どうも槍以外は使えそうに無いや」

と、彼は体を伸ばし、続けてこう言った

「お前、多分俺と同い年だろ？なら自己紹介！俺はバルト！よろしくな！」

「俺はショウ！よろしく！」

じゃあまた学園でな！と笑いながら去って行ったバルトの背中は、
非常に分厚い筋肉でがっしりと覆われていた。

「さて、俺も早いとこ決めないと・・・」

とりあえず、片手剣を手に取ってみた。

やっぱりと言うか何と言うか、合ってない

もしかして、手数で攻めるのは合ってないんじゃ無いだろうか

となると、一撃に重みのある大剣辺りが妥当か

近くにある大剣を、童話の中の勇者か何かの様に片手で持って・・・

持って・・・

持って

「ふんぬっ！」

・・・駄目だ、両手ですら持ち上がりそうに無い

いや、成長するから今は良いのかもしれないが・・・

どうやら、同じ理由で両手斧も無理そうだ

じゃあ、片手斧でも試して見るかな、と片手斧の方を向いた時、見てしまった

質素な壁に掛けてある、大きく反り返った、質量で押し切る武器

骨を砕き、心臓を突き刺し、首を刈り、命を取る

血の雨の中で狂気に塗れ、一人敵の死体の前に立つ武器

大鎌が、そこにあった

死神に頭から食べられた時の記憶が少し蘇る

辺りに飛び散る肉片、血液、体液

しかし、その時に見た鈍色の刃ではなく、キラキラ光る、鋼の刃だった

「坊ちゃん、止めといた方が良いです」

恐らく、今までより長い間見詰めて居たんだろう、ランドルフさんが肩を掴み、俺の、いや、この場合僕の意識を大鎌から遠ざけた

「長い間こんな商売やってますとね、いろんな人を見るんですわ。大剣や両手斧、メイスや、曲刀、それから坊ちゃんの取ろうとしていた大鎌を持って行った御人。

いろんな武器を持って行きますが、大鎌を持って行った御人だけは、皆一様に死んで仕舞われます。

あぁ、そりゃ人間いつかは死にますが、大鎌を持った御人だけは、不幸な事に皆喰われて仕舞うんですわ、しかも丸呑みです。

私はね、良く言う死神なんてのは、大鎌を使って、喰われた御人達の怨念じゃないのかと思いますよ。

見た所坊ちゃんはまだ人生四分の一も過ぎてません、どうか他の武器をお選び下さい」

もし、ランドルフさんの言うことが本当なら、頭からかじられた“僕”は死神に成ってるんじゃ無いだろうか

そして、それこそ天文学的な確率で、僕と俺が戦う

なら俺は、どんな武器で戦えば良いんだろうか

まだ試して居ない武器で、あの空気を切り裂く鎌に対抗出来るだけ丈夫で、早く振れる武器

となると、所謂棒や、メイス等の打撃系か、もしくは

騎士剣等に代表される、長剣

どれを選ぶかと言われたなら、もう迷わなくて良い

過去を文字通り断ち切る、長剣を選ぼう

それも、俺には他人を傷付ける力ってのは似合わ無さそうだ

だから、手の届く範囲の人を護る為の力を付けよう

騎士ってのは、元々そういう意味だろう？

「おじさん、騎士剣を下さい」

魔法、という物がこの世界には技術としてあった

例えば、火の魔法を使えば、暖炉の木に火を点せたり、水の魔法を使えば、寝てる奴を起こせたりする

風の魔法を使えば暑い時に涼しい風を得ることが出来るし、氷の魔法を使えば、飲み物を冷やす事が出来る

元々、魔法という物は、そういう生活に彩りを加える為の物だ

もちろん、ちょっと強く使えば、その分魔法で出来る事は増えていく

そうして人を傷付ける所迄強くした時、魔法は武器に変わる

そして、いつからだろうか、魔法が人を傷付ける為のみに存在すると考えられる様になったのは

火の魔法は纏めて焼き尽くし、天まで焦がす

水の魔法は、辺りを押し流し、海に変える

風の魔法は、対象を切り刻み、嵐を呼ぶ

氷の魔法は、全てを凍らせ、時を止める

そして、武器として使われる様になった魔法は、杖を通してより一層激しさを増す

そして、沢山災害を産み出した魔法は、本来の使い方をされなくなった

則ち、魔法は武器としてのみ存在する

「この杖を下さい」

この少女は、魔法を本来の使い方で使ってくれるだろうか

武器屋の店主、ランドルフは、呆れる程繰り返した願いを、また願う

第四話：マイ武器！（後書き）

ってゆーかペット迄買ったらハリーポッターのパクリにならね？って事でペットは買わない事にした

変わりに何らかの形で動物は出すよ

猫かわいいよ猫

にゃーとか癒されるじゃないか

クロネコ萌える、三毛猫も捨て難い

スフィンクス？お帰りはあちら

狼？嫁ぎに来ないかな

第五話：入学（前書き）

まぁ、とりあえず入学です

第五話：入学

カーテンを開けると、暖かな日差しと共に、身体が覚醒していく

こういう天気のいい日には、前の人生での習慣からか、自然と布団を干してしまう

寝間着から、少し上等な服に身を包み、顔を洗いに外の井戸へ

顔を洗うついでに、歯を磨いていると、俺と全く同じ服を着た幼なじみが寝ぼけ眼を擦りながらやって来た

「おは・・・ぁふぁーう」

前々から思って居たんだが、欠伸の時のコイツの顔はすごく個性的だ

何て言うか「思考を止めなさい！」水が弾丸で飛んできた

「サラ！酷いじゃないか！朝早くから魔法だなんて！」

「失礼な事考えたあんたが悪いんです！」

「考えを読むな！」

「顔に出てんのよ！」

「鼻をかんだ後のような」「死ね、ショウ」「すいません」

拝啓　向こうのお父様、お母様

どうやら男性とはやはり女性の尻に叱れるのが義務らしいですね、向こうでお父様がお母様に振り回されるのを見て、失望を覚えたのは、間違いだったようです

そちらに戻ったら是非とも一緒に飲み交わしましょう

何も告げずに遠くに行ってしまった親不孝者のジュンより

敬具

「まぁ、入学直前に怪我をしなくて良かった」

「怪我したくなければこれから発言には気をつける様に」

「・・・そういう所が疵なんだよなぁ！？」

水の弾ける音が近くで聞こえたって事は、どうやら今度は当たったらしい

ただ、血が出た時の感覚が無いのはやはり手加減してくれたんだろう

少し湿った地面に体が着いて

「あ、今日は麻じゃなくて白か」

無言で蹴っ飛ばされたぜ、チクショウ

「頂きます！」

パンをかじり、水を飲む

山羊のミルクが有るには有るんだが、余り贅沢は出来ない

「じゃあ、これからしばらくショウは寮生活か」

「そうなるね、でもどっちかと言えば寄宿舎じゃ無いの？」

「あら、寮であってるわよ。国の予算が回ってるから少しだけだけどお金は払ってるし」

「成る程」

両親も同じ学園の生徒だったらしい

その頃は『寄宿舎』で、金は払わなくて良い代わりに設備が酷かったらしい

「あの頃は男女関係無く同じ舎でなぁ、母さんと俺も一緒の部屋だったんだ」

「ふふふ、あの時はあちこちから色んな声と音がしましたものね」

「まったくだ、安眠妨害だったな」

「ん、ご馳走さま、貴重な体験談有り難うございます

それじゃ、行ってきます！」

「行ってらっしゃい！」

両親の暖かな笑顔で見送られ、木製のドアを潜り、少しの着替えと、少しのお金を持ち、守る為、そして死神になってるかもしれない『僕』を倒す為の騎士剣を背負い、靴を履く

背中越しに後ろを振り返れば、剣を掲げ、勇ましく見送るお父さんと、手を振るお母さんの姿が見えた

剣を背中越しに掲げ、挨拶を返せば、目の前の集合場所には女性の分、少しだけ荷物の多い、レイピアを腰に提げたサラの姿があった緊張してるのか、それとも楽しみでしょうがないのかは解らないが、靴の先で地面を叩いたりして落ち着きが無いのが見て取れる

「サラ！そんなに緊張するなよな！」

「かかかか、簡単に言わないでよ！楽しみなんだし、ききき、緊張するなって方が無理よ！」

「うん、まぁそうだろうな」

「え・・・？」

仲間意識を持ったのだろうか、どうやら少し落ち着いたらしい

「俺も緊張してる」

「やっぱり！そうよね！」

胸を張って言うサラは、まだ気付いて無いのだろうか、重大なミスを犯しているというのに

「でも、お前よりはマシだぜ！」

「む！言ったわね！」

ずいっと体を乗り出して来るせいで、余計にミスが目立つ

「だってさ、お前、シャツが後前反対の上に、裏表まで反対だぜ」

空気が止まった

カチコチと顔を胸元に下げ、それからまた俺の方を向く

「は、早く言いなさいよっ！」

まったくもう、と言いながら荷物を下ろし、シャツに手を掛け

「待て！俺が居る！木の影に行け！」

今度こそサラは落ち着いた様だ、魔法をぶち撒けながら木の影に走って行った

もちろん、全て俺に当たっているのが憎い

村の凸凹道を、木製の車輪が三つも四つも連なった馬車が去って行く

学園に向かう貴族の馬車だ

時折ガタンと大きく揺れながらも、決してその揺れはそのまま馬車には伝わらない

つまり、乗ってる奴のケツには問題が無いと言う事だ

それに比べ、その後ろを走る馬車と呼ぶべきか解らない、リヤカーを引いたコイツは、振動がダイレクトに伝わる

「ふんぎっ！」

おかげで今日からしばらくでかいのは出さなくて済みそうだ

しかし、そんな悪条件の中、クッションを引き、少しは楽になった筈のサラが軽く揺れている

また、緊張してるらしい

「何だぁ？また緊張してんのか？」

「う、煩いわね！放っといてよ」

「まぁまぁ、とりあえず深呼吸しろって！はい、スーハースーハー」

「スーハースーハー」

「吸ってー、吸ってー、一旦止めて吐くー」

「スー、スー、・・・ハー」

「ひっひっふー」

綺麗に平手打ちが入った、痛い、マジで痛い

「に、妊娠なんかしてないわよ！」

「突っ込みそこ！？」

いくら何でも緊張し過ぎだろう

「ってかよ～、いい加減落ち着こうぜ～！

ほら、もう見えた」

城の様に大きな建物

大きな門がそびえ立つそれは、学園、とは言えなかった

「信じらんねーけど、あれが俺達の通う学園だぜ！」

「う、うん！」

これからの学園生活に心躍らせながら、学園の門を、馬車が潜り抜けた

「しっかしよ～、何で1番つまんねー事になるかなぁ・・・」

学園生活だというのに、大事な部分であろう寮の部屋が、よりによって個室だった

「まったく、隣の芝は青いって言うけど、まさにそれだよなぁ・・・」

十分回りからしたら羨ましいであろう事も、ショウは分かっていた

「やっぱ寮生活は同居人がいてこそ楽しいのになぁ・・・」

この際何か動物でも飼うかな、と思ったが、辞めた

「そういや、とりあえず使い魔召喚はやるんだっけ」

ここでは、伝統的に使い魔召喚は行われていたが、召喚出来るのは一部だという

「やっぱ俺も男だしね、ドラゴンとか悪魔とかカッコイイのが良いよな！」

こういうのも向こうの記憶だろうか、ドラゴン等に心が強く引き付けられている

「にしても、それなりに広い部屋に一人は嫌だな・・・」

実際、この部屋はかなり広く、元々二人部屋だったのを、“不慮の事故”で一人になってしまった故の失敗らしい

その不慮の事故というのが、魔物だ

狼みたいな奴等に囲まれ、馬もそいつもバクリ、らしい

「一応俺も“僕”の時に喰われたしなぁ、辛さが分かるだけショックだ・・・」

最初にここに着た時、死神に喰われた光景が蘇る

「うげぇ、やなもん思い出した」

ベッドの上で寝返りを打ったその時

ぐぎゅうぅぅぅ・・・

「喰われた記憶で腹が減るって、何なんだよ・・・」

とりあえず、腹が減っては何とやら、と、ご飯を食べに行く事にした

「ショウ！」

食器の擦れる音、話し声やご飯を食べる音の中、何となく呼ばれた気がした

「ショウ！此処だよ此処！」

どうやら、二つ三つ先のテーブルから伸びる手の持ち主が呼んでるらしい

サンドイッチとスープの皿を載せたトレイを持ち、席を立つと、そこには見知った顔があった

「バルト！」

やはりどこか上品さのある顔のバルトだが、体つきは更に筋肉質になっていた

「ショウ！お前部屋何処だよ！」

「あぁ、一階の一番奥だよ！」

「ん？一階下か」

「ってことはお前の部屋は真上か？」

「いや、違う違う、大体真上辺りってだけだ」

「成る程！で？同居人は？」

「・・・聞くなよ・・・」

バルトは筋肉質の体の両肩を沈ませ、一気に落ち込んだ

「何があったんだ？・・・その、何だか周りに魂らしき物がみえるぞ？」

「・・・あぁ、ただ、同居人がむさい男なんだよ」

「人の事言えなくね？」

「うるせぇ！お前はどうなんだよ！」

「あぁ、それがな、そいつ、学園に着く前に喰われたらしいんだ」

「そうか、いや、悪いな、聞いちゃって」

「話題を振った俺が悪いさ」

二人して暗くなる前に、とりあえず話題を変える

「・・・なぁ、それよりさ、召喚の事どう思う？」

「おぉ！ありゃ夢だ！」

「だよなぁ！だよなぁ！やっぱりドラゴンとか憧れない？やっぱカッコイイし！」

「馬鹿野郎、お色気も忘れんなよ！」

「そっちを・・・忘れてた・・・っ！」

「おいおい、ドラゴンとかよ、便利なのも良いけど、やっぱりサキュバスみたいなお色気だろ」

「ああ、インプとかな」

『何お前らだけで盛り上がってんだよ』　『そうだよ、俺達も混ぜろよ』　『お色気なら人魚も忘れるなよ』　『馬鹿野郎、やっぱりエンジェルだろ』　『ロリコンは黙ってろよ！』

やはり、どの世界でも考えは一緒らしい、男は美女の使い魔で盛り上がり、女は美男子の使い魔で盛り上がってた

そして気がつけば、先輩達の時間が来ていて俺達はどかざるを得なかった

何はともあれ、明日から俺達の学園生活は始まる

第五話：入学（後書き）

ニクシーが男だったっけ？

注意※此処からのこの作品は、学園モノになります

それに伴い、登場人物も増えますが、まとめ等は一切公開しません

※

第六話：入学式（前書き）

小手入れしました

第六話：入学式

黄色で描かれるような、暖かな陽射しが窓から舞い込み、寝ぼけ眼を刺激し続ける

ベッドの上で無造作に跳ねる黒髪は、機嫌を直すのに時間がかかるだろう

掛け布団を巻き込み、枕を抱き寄せ、仰向けに寝ている彼は、重心を保てなくなったのか、それとも陽射しから逃げたのかは解らないが、ぱたんと横に寝返りを打つ

時計と言う概念の無いこの世界では、基本的に朝は自分の体内時計で起きるか、鶏のいなきで起きるか、人に起こしてもらうか、の三種類の中からどれかを選択しなければならない

そして今彼の居る場所は学生寮、当然、管理人さんも居る

朝ごはんの用意が出来る迄に、起きられない寝坊すけさんは、痛い目を見る事になる

則ち

くわぁん！！

まどろむショウの側頭部に、快音を響かせ、お玉のような物がクリーンヒットした

「起きなさい！」

母親にも、こんな乱暴な起こし方はされた覚えの無い気がする

一年生の通過儀礼の一つが、朝の目覚め（衝撃）だったりする

「いってぇ～！」

キッと管理人さんの方を軽く睨んでみるが、武器も扱う魔法も扱う学園の学生寮の管理人は、当然ただ者では無い

くわっ！と糸目を見開き、お玉のような物を一閃

くわぁん！！

再び頭に衝撃走る

学園の学生寮の管理人さんは、つまるところ国から派遣された、屈強な世話好きなのだった

「ご飯は食堂だよ！」

華麗に部屋を去っていく後ろ姿には、体幹の揺らぎ等、微塵も無い

そんな背中は、まだまだ若いな、とショウに告げていた

「噴破ッ！」

地面がえぐれ、一直線に軌跡を残す

跳ねる金髪は、朝日を受け、より高貴に輝いていた

筋肉質な両腕で、振り回し、身体で衝く槍は、轟音を立てて地面に模様を描く

滴り落ちる汗が、バルトの顔に、幾つか筋を描くと、彼はようやく槍を振るうのを止めた

「あぁーあ、こんなに庭をボッコボコにしちゃってまあ！」

汗を拭うバルトの背後から、青年の声が響いた

「あんた訓練するのは感心だけどな、魔法まで含めてやる事無いだろうよ！」

後で管理人達に怒られるの俺なんだからな！と憤慨しながら彼は腕を振るうと、奇跡を起こした

バルトのえぐり取った草木も含め、地面が全て元通りになっていたのだ

「いくらでも好きに訓練して良いけどよ、ちゃんと自分で戻せるんだよな！？」

「え～と、無理？」

「くぁ～！じゃあ魔法を使うなよ！槍を振るうだけにしろ！」

正直な話、今目の前で起こった奇跡を担う魔法について初めて存在を実感したバルトは、自分で奇跡を使っていたと言われ、混乱に頭が追い付いていなかった

「え？俺は普通に振るってただけですけど？」

素直に返答できただけでも褒めて欲しいバルトに、目の前の彼は屈

む様に身を丸め、つっけんどんに喚き続ける

「んな訳ねーだろ！風魔法使ってた癖に！」

「はい？風魔法？」

「そうだよ風魔法だよ！じゃないと」

そう言って彼はバルトを首根っこを片手でひょいと掴み持ち上げた

「こうやって持ち上げられるような貧弱野郎が地面をえぐり取るなんて出来るかよ！」

「ぐむっ！首・・・首・・・！」

じたばたもがく事もせずに、服の襟を前に引っ張る

気道を確保し、文句を言うだけの余裕を作った

「首が絞まるつってんだろうが！」

叫びながら身体を前に倒し、浮き上がった足で腕を蹴り飛ばす

乾いた音を立て、腕を襟から離させる事に成功した

「うん、身体の動かし方は及第点かな」

暴れるバルトを尻目に淡々と告げられる彼の言葉

「ふざけんな！生死を賭けたテストなんてお伽話の中の事をしてんじゃねーよ！」

突っ掛かろうとし、あしらわれながらバルトは詰め寄る

「良いじゃん、助かったんだし

つーか俺一応先輩だぞ？その喋り方は何なの？馬鹿なの？死ぬの？

ってか近い」

「うっ・・・」

「まぁいいや、これから訓練する時はこれ付けてろ」

小銭か何かのように、軽く投げられる腕輪

あまり重く無いのだが、不思議な模様が彫ってあった

「何だ？これ」

「ああ、簡単に言えばお前みたいな魔法を使うサボり防止の腕輪だな」

とりあえず付けろ、と急かされ、釈然としないままパチンと腕に嵌めてみる

途端、全身に重力が掛かった

「お前みたいに生まれてすぐに“囲まれた”奴なら今みたいになるな」

筋肉の重み、今まで何分割かされていた重みにたえられず、バルト

は膝に手を突いた

「どうだ？魔法に頼り、自分で鍛えた筋肉の鎧は？」

「立てない・・・」

「だろうな、そんな所だと思ったよ、ま、精々朝飯に間に合う様にするんだな」

ひらひら、とふられる彼の腕にはバルトの付けてるのと同じ腕輪が付いていた

中庭の端まで行くと、思い出したかのように腕輪を外し

「今回のこれはサービスなぁ！！次やったら自分で何とかしろよぉ！！」

と、地面を殴った

途端、全身泥の鼠が中庭を駆け回った

「どうよ？意識して使う、魔法の“奇跡”は？」

「訳がわからん・・・」

「だろうな、そんな所だと思ったよ、ま、精々朝飯に間に合う様にするんだな」

ひらひら、とふられる彼の腕にはバルトの付けてるのと同じ腕輪が付いていた

中庭の端まで行くと、彼は思い出したかのように腕輪を外し

「今回のこれはサービスなぁ！！次やったら自分で何とかしろよぉ！！」

と、腕輪を口に当てて叫んできた

「何で声が届くんだよ・・・」

端から端まで大体一キロ程

普通に叫んでも声は届かないものである

「ふふふ、やっぱり魔法は素晴らしい」

ため息を吐こうとするバルトの背後からまた声が聞こえてきた

「あんた誰だ？女の子は見分けつかねぇ」

初対面の女性に、失礼極まりない台詞を吐きつつ、自己紹介をさせようとは中々ふてぶてしい

「安心・・・とは違うわね、覚悟しなさい。貴方と同学年のオウルよ」

黒髪、長髪、クールではあるが少々取っ付き難い雰囲気の少女は、腕を顎にあてて考え込んでいた

「？何で覚悟するんだ？同い年なら安心すべきじゃねぇの？」

友達になりたいのだろうか、恐れずに話し掛けるバルトに対して、冷静に彼女は語る

「貴方、最初の私の台詞を忘れたの？ああ、やっぱり魔法は素晴らしい！よ。つまり、私は魔法を愛する自覚のある変人よ」

そんな一歩間違えれば貴方も変人、つまり関わらないで、と暗に告げるオウルに対して

「別にいいんじゃね？」

と、バルトは返した

へ？と思わずオウルは目を丸くした

「魔法を愛するってのは普通の事だろ？人を傷付ける為にあるんじゃないしな。それに、どんなにオウルが変わっていようと、オウルはオウルじゃん」

開いた口が塞がらない、いや、正確にはぱくぱくと開いたり閉じたりしていた

「（私は、変人の筈。人を傷付ける魔法を愛し、奇跡を起こす魔法を愛し、死者を操る魔法を愛する生粋の変人、いや変態よ）」

「・・・私は変人よ、それ以上も以下も無い、少なくとも周りに寄らない方が賢明ね」

そういうと彼女は、音も無く歩き去って行った

ああ、そういやいきなり後ろから声がしたんだっけ、と思い出し、そしてもう一つ思い出した

「立てねぇ・・・」

ふんぬっ！と力を入れようにも力が入らない。結局、彼は朝ごはんには間に合わなかった

「只今より、本校・・・本校・・・まぁ、長いからいいや。とりあえず入学式を執り行います。・・・ねぇ、執り行いますで合ってるっけ！？合ってる！？よしＯＫ！全員、起立」

椅子を投げたのは許されると思う。ってかあらゆる所からいろんな物が飛んでた

気の抜けた司会進行により、如何せん緊張感の無い入学式が続く

「着席して下さい。やーい、椅子投げたから座れねぇでやんの、立ってろバーカ！」

誰だか知らないが前の奴を引き止めれた俺を褒めてほしい

しかし、俺の努力も空しく、上級生を皮切りに、新入生の俺達からも襲い掛かった奴らが居た

が、見えない壁か何かに阻まれている

「演出ご苦労、え～と、特に上級生な、ぶっちゃけサクラ有り難う。新入生は覚えとけ、これが魔法な、・・・」

ああ、やっぱりそうだった、学園側が何もしてない訳無いと思ったよ

そんな中、やや離れた所で、バルトが倒れていた

何やってんだろあいつ、とか思ってると話は続いていた

「え～と、つまり俺は生徒指導のセンセーの中で一番カッコイイから名前は覚えとけ、カインなカイン」

どうやってそこに飛んだんだろう

疑問に思っていると、後ろから顎に無精髭の先生が出て来て、カインセンセーを引きずり倒した

「話が長くなるといけないので、校長の話とかカットでクラス分けを発表する」

それで良いのか、この学校

涙目になってるお爺さん（多分、あれが校長だろう）を尻目に、淡々とクラス発表についての説明がなされた

「生徒諸君にはカード的な物が渡されたと思う、これはクラスを表す物だから無くさない様に！

それぞれマークが入っているな、今からマークとクラスについての発表をする

まず狼の者はAクラス、次に獅子の者はBクラス、蛇の者はCクラスとなる！

最後にDクラスだが、鷹のカードだと思う、このクラスでは、それなりに特殊な事をするので覚悟しておく様に！」

やべえ、Dクラスかよ

多分以前の世界の事とか関係してるんだろうなぁ

「次に担当教諭だが、Dクラスのみ言っておく、カインだ。

他のクラスは問題無いので安心するように」

え？方向性を間違ってませんか？

「ではこれで、入学式を終了する！新入生諸君はそれぞれのクラスに移動する様に！上級生は・・・」

どうやらはちゃめちゃな学園生活になるらしい

まぁ、普通科高校とかの前の世界と違って楽しめる学校生活には変わりがないだろう

ちなみに、カインは立ち上がれなかったらしく、プロレスラー宜しく肩を先生方に支えられ、運ばれて行った

第六話：入学式（後書き）

拭えないイマイチ感

第七話：剣と魔法の英雄録？（前書き）

剣と魔法、勇者の物語

後々、これが深く関わる事になります

第七話：剣と魔法の英雄録？

彼は、身を鈍く光る立派な鋼の鎧や、銀の輝く鎧ではなく、両親、恋人の住む村の服に包み、両の手で使い古された長剣を提げ、まだそんなに使われていない幅の広い剣を背負っていた

茶色の長髪を無造作に後でくくり、鋭い眼光を際立たせて居た

背丈は高く、筋骨隆々、しかし体重は背丈に合った物だった

その日、彼は村の子供達が村の外の洞窟に入り込んでしまったと、子供達から助けを呼ばれ、剣を取り、疾風の様に駆けて行った

彼が洞窟に入るや否や、魔物の群れが行く手を塞いでいた

牙を、爪を、そして根棒や剣を手に襲い掛かる魔物を目の前に、彼は剣を抜き、目の前で振り払った

途端、炎を帯び、赤く染まった剣を構え、縦横無尽に道を走り、切り捨てた

炎は魔物を喰らい尽くし、彼の走り抜けた道は焔に包まれた

やがて彼は洞窟の奥へと辿り着く

辺りには濃い血の匂い

火の掲げられた壁は、余すところ無く洞窟を照らす

目の前に鎮座する巨大な鎧に包まれたアンデッド

その足元に染み込んだおそらくは子供達の血

そして、白骨と化した死体に、異臭を放つ腐敗した死体

その全てが幼い子供の物

怒りに震える勇者に、アンデッドはカタカタと鎧を震わせ、笑い、口を開く

「普段、大人しくしているものだ、この鎧が錆び、磨かれ、また錆びる頃、今回の様に愚かな子供に、お前の様な命知らずが食料としてやって来る」

カタカタ、ケタケタ、カチャカチャ音を立て、アンデッドは笑う

「お前はどうやら強靭な様だ、殺し、喰い、骨をしゃぶった後、仲間にしてくれよう」

立ち上がり、口の中から靴を吐き出して、構えるアンデッド

勇者は既に怒りの限界を超えていた

「ふん、貴様の様なクズに喰われてたまるか！長く生きただろう、葬り去ってやる！」

振り下ろされる腕をいなし、鎧を砕きながら彼の剣は赤く染まる

灼熱の焔を押し止め、剣を振るい、空気を、大地を震わせる

鎧は溶け、死体や骨が蒸発し、最後にアンデッドと勇者だけが残る

黒い煙を発しながら膝を付くアンデッドを勇者は切り捨てる

「間に合わなかった、済まない・・・」

炎を撒き散らし、燃え尽きたアンデッドに背を向け、最後に呟いた

贖罪は、一体誰に届いたのか

第七話：剣と魔法の英雄録？（後書き）

さて、少しネタバレをしますと、勇者は一人では無いです。

後になり、出て来る［ギルドナイト］［カンパニー］［騎士］に何やらかんやらあるとか

第八話：鷲の意味（前書き）

短いです、一応これは新しい章の、始めの部分になります。

前回みたいなお伽話の入る度に章が切り替わると思っていて下さい

第八話：驚の意味

意外にも、この世界にもタバコが在ったようだ

目の前の我等が担任カインがぷかぷかと吸っている

「先生学校内って禁煙じゃないんですかー？」

「あぁ・・・これは薬だ薬」

どうやら愛煙家の世間からの反応も似たような物らしい

「大体職員室とか保健室とかでタバコ吸ってる奴らが居るのによぉ・・・ってやべぇ！」

タバコの先を燃やし尽くし、咄嗟に上昇気流で空気を回し、空気を入れ換え、ついでに吸い殻を捨てたカイン先生、それに一歩遅れて、ハゲの先生が入って来た

「カイン貴様タバコを吸っていたな！」

「吸ってねぇよ！大体手前だって職員室や保健室、修練室でプカプ

カやってんじゃねぇか！」

「そうかカイン、よっぽど疲れていたのだろう。今はゆっくり休むべきじゃないか？」

「あぁ？オッサンがサボり推奨なんて珍し・・・待てよ、何だそのハンマーは？」

「大丈夫だカイン、目をつぶって、開ける頃には既にお前の部屋に居るさ」

「脅迫か？脅迫だなこの野郎！」

「いいから目をつぶれ・・・！」

「つぶって堪るかヤクザ教師・・・」

ギリギリと音を立てるカイン先生とヤクザみたいな先生の腕、お互い血管は浮き出て、顔は真っ赤になっている

正直、ヤクザみたいな先生はタコにしか見えなかった

そして、カイン先生とヤクザ先生の力比べは、カイン先生がヤクザ先生の股間を蹴り上げた事で終了した

「ぐぎゅっ！？」

思わず縮み上がるマイサン、周りの男子生徒も同じ様な反応をしていた

「安らかに眠れ・・・クソ野郎・・・」

手を合わせ、上着を顔に掛けたカイン先生は、教卓に戻ると、少し真面目に話出した

「あぁーっと、一応担任のカイン・・・いや、ついさっき言った気がするな、まぁいいや。
一応、そこで伸びているヤクザがこのクラスの副担任のアベルだ、覚え無くて良い。

とりあえず、自己紹介より先に、このクラスの意味を教えておく。
まぁぶっちゃけ自己紹介長いから自分達で後でやってろって話なんだが」

改めて言うが、それで良いのか、この学校

「このクラス、まぁ“鷲”なんだが、ある経歴、それと才能を同時に持ってる奴が集められたクラスだ。

まぁ他の獅子や蛇とかも同じ様に集められた奴らだが、このクラスが一番特殊だな」

ここで、一旦先生は息をついた

「このクラスは、前世、もしくは今生で死神によって死んだ、もしくは怪我をした者の内、魔法を扱い切る才能が強い奴が集められたクラスだ。

要するに、前世、今生のどちらかで酷い目に遭って、一定以上の恐怖を味わい、魔法のリミッターを外す事が出来る、超強い奴の集まりって事だな」

「先生待った、とにかく待った！」

「ん・・・確か、ショウだったか？お前は一応一番の期待株だぞ？」

「イェーイ！じゃなくて！他の奴は知らねぇけど、俺は魔法、使えないぞ？」

「あぁ、皆使えないな、原則、学校以外で魔法は教えちゃいけないし、魔法のルールなんて刻まれるだけで誰も覚えて無いからな」

「はぁ？」

「ま、とにかく、学校に来なけりゃ魔法は使えねーって事だ、楽しみにしてろ。

ま、と言う訳だ、魔法を張り切って覚えてちょーだいな。

鷲は一番強い奴らが集まったクラス、将来を決められたクラスって事だ。

後は自己紹介なり何なりやってくれな！」

言い切り、アベル先生を抱え、ドアに歩いていくカイン先生

だが、パッと後を振り返り、何人かの名前を呼んで、付いて来い、と連絡を行った

一番の期待株だかなんだか知らないが、当然の様に、俺の名前も入

っていた

第八話：鷲の意味（後書き）

はい、お疲れ様でした、第二章のプロローグになります。

この小説の構成ですが、学校を卒業するまでが、主な話になっております。

ついでに言うと、・・・いや、止めておきましょう。

以上、天の声でした、三人称の人でもオッケーです！

第九話：道中、自己紹介

鷲

遥か高みから獲物を正確に仕留め、連れ去る生き物

その為に、常に冷酷に空から地を這う蛇、迂闊に飛び出した兎や鼠を捜している

とりわけ世界の地方によっては鳥葬と言う、獰猛な鷹や鷲に人を食べさせる所もあった気がする

さっきの俺達を呼んだ時のカインさんの目は、酷く冷たい目だった

俺達は獲物なんだろうか

・・・いや、それだけは無いだろう、むしろ有っちゃ駄目だ

これからの事が想像つかないだけに、俺は溜息が漏れそうだった

「お前達、これからの学園生活、このグループで基本行動すること

になるから自己紹介しておけ」

少なくとも歩き出して２０分で初めて言う台詞じゃ無いと思う

「・・・クソッ、このオッサン重たいな、投げ捨ててやろうか」

あんたがした事じゃないのか！

「あら、じゃあ私にお任せ下さいな」

「ん？いや、良いよ、女の子に臭くて重いの持たせらんないし」

「いえ、持ちませんよ」

「？　じゃあ、どうするんだ？」

「こうしますの」

そう言って、少女は軽く腕を一振りすると、カイン先生の肩からタコがふわっと浮かび上がった

「おぉ～！」

「少しですけれど、風魔法が使えますの。私はオウム、獅子に居る

オウルの妹だったりしますの。

見た目通りメイジですから、殿方は私を守って下さいな」

毅然とした態度で肩に掛かる緑色した長い髪を払いのけるオウム

気品のある動き、話し方からするに貴族出身だろうな

「あぁーっ！もう！ふわふわふわふわと危なっかしい！」

「な、何をおっしゃいますの貴方は！私の魔法に文句が有って！？」

「煩い！耳元で怒鳴るな！それに俺が言いたいのはそういう事じゃねぇ！」

お前も十分煩いんだが

口喧嘩しながらタコに近付いて行ったそいつはタコを片手で持ち上げ、肩に担いだ

「俺はマテライト！見ての通りパワータイプだからな！前衛は任せろ！」

確かにかなり打たれ強そうだ

しかしコイツはなんでフードを取らないんだろう？

「・・・そんなマテライトに質問」

「ん？何だ？」

「・・・どうしてフードを取らないの？」

おぉう、丁度良いタイミングで質問が来たな・・・

「ん～、ま、同じ様な奴らの集まりらしいし、言っちゃってもいいか。

よいしょっと」

フードをマテライトが脱ぎ、くすんだ灰色の髪の毛が見えた時、理由が分かった

彼の頭頂部に付いてる耳が、片方無いのだ

「ワーウルフの一族ってのも一応理由だったんだが、やっぱ一番の理由は死神に片方喰われたのがそうだな。

気分を悪くさせたならごめんよ」

「・・・いや、こっちこそ悪かった。

・・・俺は、トーマス、一応東方の出身で、武器もあっちの物。

・・・マテライトだけに言わせたく無いから予め言っておく。

・・・俺は、親を喰われた」

何でも、トーマスは祖父の家から帰って来たら、丁度親が喰われたらしい

「下手したら一番キツイタイプね・・・」

「・・・安心しろ、お前は眼中に無い！」

「そういう意味じゃ無いわよ青モヤシっ！」

確かに、大きいサイズの服に、身長が高めのトーマスはそう見えても可笑しくなかった

「・・・一応、これを扱い切るだけの筋力はある」

そう言ってトーマスが懐から武器を取り出した

消えかけている向こうの記憶が正しければ、確か鎖分銅といった気がする

「フレイルみたいな物か？」

「・・・まぁそんな所、正確に言えばムチとフレイルを足して二で割った物」

「駄目だ、俺は手先が器用じゃねぇから使えそうに無いや」

「・・・いつでも教える」

「頼むぜ！」

鎖分銅は暗器じゃなかったか？絶対マテライトには合わないと思うんだが

「・・・君の番」

「ああ、そうだな。

俺はショウ、武器は騎士剣で、一応選んだ理由は前世で死神に喰われたから、今度は皆の命を守りたくてな」

「凄い痛んでるな、それ」

「此処に入る前に何度か襲われた事も有ったしな」

「・・・無事で何より」

「サンキューな。

で、先生は何で俺達の担任何ですか？」

「おいおい、いきなり振るなよ、困るじゃねぇか。

まぁ、そりゃあ一応鷲の卒業生だからかな」

「「「「「嘘だろ・・・っ！」」」」」

「何で皆して地面に手を付くんだよ、照れるじゃねぇか」

「「「「褒めて無いからな、それ！」」」」

「おいおい、一人乗れて無いからな～、それにそこのアベルも卒業生だぞ」

「マテライト、今すぐそのタコを離しなさい、風魔法の利用方法の真髄を見せてあげる」

「落ち着け、オウム、アベルさんに罪は無いぞ！」

「そうだ、タコは真面目でいい人っぽいじゃないか！」

「その臭いタコに人生で一つでも接点が有った事が許せないのよ、察しなさい」

「「カイン先生、早くオウムを止めて下さい、僕等じゃ無理です」」

「へっ、丁度いい、ヤクザの息の根は此処で止めるべきだと俺も思うんだ。

止めるなよ、マテライト、ショウ」

「「そんなぁ！」」

スッ

「・・・落ち着くべき、オウムにカイン先生」

「「おぉ！トーマス！」」

「「そこをどいてくれ（ちょうだい）トーマス」」

「・・・息の根を止めたら、この薬が使えない」

「「トーマスゥゥゥ！」」

「それを使ってからでも遅くは無いな」

「ええ、そうですね」

「・・・効果は保証できる、任せろ」

「クソッ止めるんだトーマス」（でも止めようとしない）

「そうだ、思い止まるべきだ」（ワクワクを隠せていない）

そして、トーマスがタコの鼻をつまみ、薬を流し込んだ

ボムッ！

『・・・グオッ！何だ！？身体が、動かぬっ！』

『ギャアアアアア！』

薬を飲んだタコの有様は、散々なものだった

目は小さくなり、鼻は・・・いや、これ以上思い出すと吐き散らしてしまいそうだ

ただ、一つだけ言えるのは、虹色に光る彼の頭を見て、あの時トーマスを止めなかったのはやはり間違いだったと確信出来る

第九話：道中、自己紹介（後書き）

心地好い筋肉痛、しかし、未だに瞳と髭に虹色が残っておる

三日後のアベルの日記より

第十話：白モヤシ

「さて、着いたぞ」

カイン先生に連れられてやって来たのは・・・

『さっすがカイン先生！うひょーい！』

女子更衣室だった・・・

「バインド！」

『ぐあっ！』

「何やってんのよ！あんた達は！」

「手前！何しやがる！」

「そうだ！学園生活上、一度は体験しておくべきイベントじゃないか！」

「ショウ、全く間違って無いぞ」

「・・・しかしこの縛られ具合・・・中々悪くない」

「そうだそう・・・え？」

「・・・そんなに見るな、誰にでもある、ジョークだ」

「・・・だよなぁ、いや、疑ってすまなかった、トーマスがまさかーー」

「だが半分程本気だったからあながち間違いではない」

『・・・ッ！』

ズザザザザッ！

「・・・作戦成功、突入する」

『ゴー！ゴー！トーマス！！』

「ま、待ちなさい！」

バインドを連発するも、今のトーマスには全く当たらない

トーマスが桃源郷に一歩入り込んだと思ったその時

ババチィッ！

『！？』

入口の空間に電気がほとばしり、トーマスがこちらに跳ね飛ばされた

「あかんで～、乙女の裸を覗けるのはケツまで真っ黒な卑怯な男の特権やでぇ～」

声の方に目をやると、少し向こうの廊下から真っ白な髪の毛の痩せぎすの男が歩いて来た

「おいおい、待ってろっつったろ？」

「いや、あかんあかん、ワイ少しばかり気が短いんでなぁ」

「先生！そんな人よりトーマスを！トーマスが大変な譫言を！」

「・・・ネズミ？いや、ロボットでも無い俺の耳なんて、いや、それより俺は狼だが、キック？何の事だ？」

「世界が違う！違うんだトーマス！」

「・・・機関車でもなければ復讐者でも無い！」

「あぁ、ちっとどいてな」

[人、その名を冠する罪深き気高い民族よ、汝の誇りを守るため、今一度器を満たし給え]

「チチンプイプイプイ～っとな？」

「・・・アイデンティティが揺らいだ気がする。危なかった」

「おぉ、何や、一応少しは残っとったんか、すまんのぅ」

「何を心にも無いことを、そんなに後輩思いじゃねぇだろ、モヤシ野郎め」

「いやいや、そんなこと無いですよ～。それより、先生らどうしてこんな所に来てん？」

「一言で言えば、お前に今年の鷲の鷹に成れる奴らを見せたかっただけだな」

鷹？何の事だろう、それにこの白いモヤシは一体何者だろう？

「あぁ、成る程・・・うん、全員何とかなるんちゃう？」

「おぉ！今年は優秀？」

「ぼちぼちやね、特にガチガチの魔術師の子はちと頑張らないかんよ？」

「ちょっと！私の何処がこいつらより劣ってるのかしら！？」

「強いて言えば・・・そやね、潜在魔力量やね。

これから増やす努力せんとちと厳しいで？」

「マテライトにさえ負けてるですってぇ！？もう一度良く見なさいよ！白モヤシ！」

「オウム・・・俺の立ち位置って・・・」

泣くなマテライト、何時かきっと報われる時は来るって

「ん～、しゃあないなぁ・・・」

白モヤシは右手でガシガシ後頭部を掻きむしると、左手で肩を鳴らし、両手をだらんと下げた

下がった白モヤシの手には、大小様々な腕輪が煌めいており、身体の重量が無駄に増えてる様に見える

そして腕輪を見た時、オウムとトーマスが息を呑むのが分かった

「・・・マジックアイテム」

「おぉ、君中々優秀やねぇ！
ならこれが唯のマジックアイテムとちゃうのも分かるな？」

「それくらい私でも分かるわ、貯蔵用の腕輪に、召喚用の腕輪でしょう？」

駄目だ・・・話が全く解らんっ！

「あれ？でも貯蔵用の腕輪は何か違わねぇか？貯蔵用は貯蔵用なんだけど」

マテライト！おいてか無いでくれ！

「だぁっ！もうショウ！そんな目をしなくても教えてやるっつの！」

「いや、えぇよ先生、ワシが教えるよ」

「是非お願いします！あっ、待ってオウム、何で踵が首に振り下ろされた訳！？」

「・・・オウムが子供だから」

『成る程』

「アンタ達、覚えてなさいよ・・・！」

「そんなことどうでもいいからそこの、え～と、白モヤシの話を聞こうぜ！」
「話の軌道修整ありがとう、マテライト？クン。
まぁ、彼の言う違和感はおうとるよ、貯蔵用の腕輪は容量がちゃうねん。
大体3～5倍位やねん。」
3～5倍、その言葉だけで俺以外の三人が息を呑んだ
「化け物、という訳って事ね・・・」
「え？何々マテライト、そんなに凄いの？」
「馬鹿野郎ショウ、普通の貯蔵用腕輪一個あれば魔術師団が大体半分魔力を回復出来んだよ」
「・・・つまり、白モヤシの一つで大体二つの魔術師団が回復出来る」
「それに、あの腕輪のを全部使ったファイアーボールを唱えたら、この学園は蒸発するわよ」
「・・・加えて、あの腕輪は基本的に自分の魔力を貯めておくもの、人の魔力じゃない」
「つまり、白モヤシは腕輪×2の魔術師団が一緒に居るのと同じっ

て事だ」

「・・・化け物？」

「しかもとびっきりよ」

何て事だ、白モヤシと呼ぶのは最早失礼の極みだ、これからは

「白モヤシ閣下と呼ぼう・・・」

「兄さん敬う気あらへんやろ？」

『全然！』

「何で声が揃うんやっ！」

『だってモヤシだし・・・』

「ワイか？ワイが痩せとんのが悪いんか！？ってか先生までおっしゃるんですか？」

「五月蝿いぞ、モヤシ」

「うきぃーっ！今ここで斬れないのがムカつくぅぅ！」

「あれ？そういや先輩の武器って何すか？」

「おぉ！え～と、マテライト君か？よくぞ普通に聞いてくれた！ワ

イの武器は・・・コレや！」

腰にモヤシが手を当て、一気に引き抜く動作をすると、鈍く光るロングソードが二本手に握られていた

「へっへ～ん、カッコエエやろ～」

袈裟掛け、唐竹、逆袈裟、胴、小手、薙ぎ払い、刺突

全て流れるように出て来て、急所を刻んでいる

「・・・どや！」

『うぜぇー』

「何でやぁぁぁぁ！」

頭を抱えて叫ぶ白モヤシ、もうこれ以上は結構とばかりに、手を叩いて口を開くのをカイン先生は止めた

「かなり話は逸れたが、この人は一応お前達の先輩に当たるアソルだ、白モヤシでも良いが、何かあったらまず最初に相談するように！」

『はーい』

「うん・・・もう白モヤシでええよ、うん」

アソル先輩は最早白モヤシとしか呼ぼうとしないカイン先生に絶望

しているようだ

あの虹色・・・止めとこうしかり、カイン先生のペースにすっかり嵌まってしまっている

「あぁ、そうそう、今夜は校庭に大体9時集合な、先輩達に顔見せと先輩達から何かしてもらえるらしいから・・・やべ、教室の奴らは・・・めんどいな」

それでいいのか、この学校

「とにかく、今日は街に出るなよ、大人しくしてろ！」

第十一話：Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ・・・（前書き）

無念・・・まさかこんなに遅くなるとは・・・

第十一話：Welcome to・・・

コンコン

扉を優しくノックされる

少々一人で使用するには広すぎる部屋だが、不思議と淋しさは感じなかった

「はいはいー」

既に日は沈み、寒さすら感じる白く光る月と太陽と見紛う程真っ赤な月が他の星明かりを押しのけ主張していた

ガチャ・・・

「あれ？」

ドアを開け、辺りを見回すが誰も居なかった

「こっちこっち」

後ろから声がしたが振り返っても誰も居なかった

「こっちこっち」

「こっちゃにゃん？」

「鬼さんこちら～！」

「こっチコッち」

「こっちダヨゥ・・・」

ぐるぐる、ぐるぐる

声が部屋中を飛び回り、四方八方から声がする

おかげさまで首が疲れたじゃないか

「こっちダヨゥ・・・？」

「「「「「こっちこっちこっち！」」」」」

だんだん頭に直接響く様になってきた・・・

思わず額を押さえてしまう

パンッ！

顔をしかめて座り込みそうになった時、手を合わせる音がして頭に響いていた声がスッと消えていった

「・・・ウン、これならこれからも参加して大丈夫みたいだね」

窓の方向、丁度真後ろから声が聞こえる

今までとは違い、額を押さえる様な声ではなく、普通の声が

「やあ、招待状一枚目は君だよん」

窓枠に腰掛けて話し掛けてきたのは白黒反転した目の女性

「始めまして、貴方の一つ上の先輩でアルナ＝マルナです」

裾を翻し、窓枠から飛び下りるアルナ先輩

「はい、招待状！貴方はこれからも集まりに参加する資格有りよ」

受け取り、確認しようとすると、招待状は形を変え、耳からぶら下がるピアスになった

「クス・・・そのピアスが招待状よ、ほら、ね？」

見ると、先輩の耳にもピアスが付いていた

「じゃあ、今夜は全員で行われるパーティーをお楽しみ下さい・・・じゃあね」

先輩は手を軽く振り、一回転したかと思うと、気が付いたら消えていた

『あ、そうそう、武器は持って来といてね！』

扉に刻まなくても口で言えば良かった気がする

コンコン

「はいはーい」

一応用心の為、拳を握っていつでもカウンター取れる様に構えておく

なんせ、朝みたいにいきなり実力の差を見せられる所だからな

でも、あの腕輪は何だったんだ？結局保健室で取り上げられたし

「・・・？」

おかしいな、誰も居ない

「誰だったんだ？」

「さぁ？」

コイツはルールメイト、自分から動こうとした所を見た事がない

そういやショウの奴、実質一人部屋かよ・・・ま、それはそれで嫌だけどな

もう夜も遅いし・・・寝ようかなぁ・・・

「待て待て、取り敢えず待て」

「・・・何か言った？」

「いや、別に？」

変だ、いきなり声が聞こえてきた

「俺だよ、俺」

「いや、違うよ、私だよ」

「僕だよ・・・僕だよ・・・僕ダヨ・・・ボクダヨゥ？」

頭が酷く痛む・・・何だろう、ただの声なのに・・・

「あ～あ、残念・・・ってか獅子だし無理か」

「ッ！」

驚いた、俺はいつの間にか床に転がっていたらしい

そしてコイツはいつ此処に来たんだ？

取り敢えず・・・ッ！

「シッ！」

パンッ

「ん～危機管理は良いけどそれじゃ何にもなんないなぁ」

「マジ・・・？」

脚払いを叩き込んだと思ったら逆に脚を掴まれていた・・・

受け流されるじゃなく、掴まれる

つまり、力を完璧に制御され、俺の脚はいつでもポッキリされる可能性があるということだ

「うん？あぁ、俺は白モヤシみたいに鬼畜じゃないから流石に折らないよ」

「ッ！」

「あれれ？逆に怒っちゃう？・・・そりゃあ怒るよなぁ」

「ナメ・てん・じゃねぇ！」

ミリッミリミリ・・・

「うーん、諦めないのは良いんだけどな、取り敢えず無理でしょう」

！？

流石にさっきのは分かった

あの状態から立たされたんだ

さっき目の前のコイツが一回転していた

って事は寧ろ俺は振り回されたって事だ

「取り敢えず、ようこそ学園へ。

そして、今夜限りのパーティーをお楽しみ下さい・・・後ろの子も連れてきてね？」

そしてコイツはそのまま背を向けて歩き去っていった

・・・朝の事と言い、先輩には化け物しか居ないのか？

「・・・はぁ、悩んでもしょうがない、か」

そういえばさっきのは俺とだけ話していったな

「・・・気絶してるのか」

だからか

・・・今更起こすのも面倒だし置いてくか

◇　◇　◇　◇　◇

「で、何で俺達は一緒に行動するんだ？」

「え～っと、あれじゃないか？試験ってやつ」

「・・・普通、上級生が魔力抵抗力を上げるのに浴びる魔力と同じ

量の魔力を浴びせられた」
「ただ一つ言えるのは、今年は私達だけが合格者って事ね」
「だからかよ・・・」

思わず溜息が出てしまうのを止められる訳がなかった。
「何でショウは一人の方がよかったの？」
「・・・そりゃあ、気楽だし」
「・・・本音は？」
「誰か女の子と二人っキリ、それも同級生の可愛い子、まぁ保険に幼なじみも居るし」
「ショウ、お前勝ち組だったんだな」
「・・・首を差し出してくれると嬉しい」
「待て、トーマスもマテライトもちょっと待て！」
「そうよ、此処に美少女も居るのに」
え？
「・・・何よ」

「「「気にするな、どうも疲れていて幻聴が聞こえただけだ」」」

「・・・そう、じゃあこの美少女が貴女達の」

「「「ゴメン、ちょっと今日は疲れているみたいだ」」」

ありえない、魔法オタクのコイツが美少女なんてありえない・・・・っ！

「死になさい！」

「うぉーい！何でそんな下級魔法がえぐいんだよ！」

風の刃が全力で俺達を襲って来る

ただあんなに出鱈目な範囲と威力の風の刃なんて見たこと無い！

「ギャアァァァァァァァ！」

「「マテライト！」」

くそっ！マテライトが飲み込まれた！

どうにかしてトーマスを生け贄に捧げないと！

「・・・飛び越える」

おおっ！あの高さなら飛び越える事が出来るだろう！

「甘いわね、そっちにも張ってあるわよ」

「・・・無念！」

ああっ！トーマスが飲み込まれた！

くっ、こうなった以上俺もかく

「覚悟くらい決めさせろぉぉぉぉぉ！」

その時、巻き込まれたのだろう門がミシミシ音を立て、俺の方に来て・・・

「ピギャぁぁぁぁぁぁ！」

見事に潰された

第十二話：・・・趣旨は？

辺りに香ばしいタレの匂い、そして肉の焼ける匂いに魚の焼ける匂い
後は特産品の果実を搾ったジュースと酒の匂いとそれを混ぜられた
パンの甘い匂いが漂っていた
そのどれもが俺の鼻をくすぐり、腹に働く気を起こさせる

ぐぅ～

・・・ほら見ろ、腹が物欲しげに泣いてるじゃないか

「ショウ・・・分かるぜその気持ち！」

「別に手前に分かって欲しくねぇよ、さっきからフルコーラスの筋肉達磨」

「なにぃっ！？」

『・・・』

「全員で頷くなぁっ！」
さて、この筋肉はほっておくとしても・・・

「祭は祭だけど・・・街に居るのと変わんねぇよ」

「・・・そもそも、俺達が被害に遭った珍しいケースじゃないのか？」

「いや、他にも何人か被害には遭ったみたいよ・・・招待状は持って無いけど」

「と言うことは俺達って凄いのか？」

『コイツと一緒にされたく無い！』

「泣いて無いぜ・・・泣いてなんか無いさ」

それにしても、さっきから気になってたんだが、いい加減突っ込んで良いよな？な？

「何でカインさんが居るんだよ」

「察しろよ、たかりに来たんだよ」

「いや、帰れよ」

ダメだ、この人さりげなく自分の分も上乗せで注文する気だったな・・・！

「まあ、本題は置いといて、おまけに入ろうか！」

『帰って良いっすか？』

「待てよ、オイ！」

全く、先生にたかられる為に来たんなら只の損でしか無いじゃないか！

「こっちだよ、こっち」

「ったく、何があるんすか？」

「黙って着いて来いよ」

そして、カインさんに着いて出店の前を歩く事数分、即席の闘技場に着いた

「実は此処は今夜に限って生徒全員に公開されるんだがな、普段は招待状付きの生徒と俺とタコだけが入れる事になってる」

「何で今日に限って全員に？」

「簡単だ、今日は歓迎会、先輩の実力を見せ付ける良い機会だからな！」

「・・・普段は何を？」

「一言で言えば、鍛練。
もうちょっと真面目に話すなら、魔力量、質の底上げと、各武器の技術を上げて貰う。
後はそうだな・・・エンチャント関連だな、うん」

ん？聞き慣れない単語があったな

『エンチャント？』

「ああ、要するにこんな感じだよ・・・よっと！」

カイン先生は懐からナイフを取り出すと、近くにあった木に突き刺した

すると、木に突き刺したナイフの反対側も穴が空いた

それもナイフの幅よりもかなり広く、もうすぐで木を真っ二つにしようとしていた

「ええ！？こっちはナイフだけで向こうは真っ二つになりかけで・・・ええ！？」

「まあこんな風に武器に魔法を纏わせるのがエンチャントだからな、こんなんも出来るぞ」

突き刺しているナイフをカインさんが握った時、木が音を立てて凍った

「まあ、こんなもんだな」

「いやいや、そんな手抜きじゃこいつらは納得せんでしょう」

カインさんの後ろから伸びてきた手が、ナイフを無造作に掴み、目に見える量の魔力を注ぎ込んだ

「よいしょぉぃ！」

すると、木が大きく脈打ち、三回り程大きく成長する

それだけでは無い、成長した木からからんと乾いた音を立てて、木の棒が落ちると、木の棒は新たな木になった

「イェイッ！ワイ最高！」

「手を抜けよ白モヤシ」

はっちゃけた白モヤシ先輩にカインさんの割とゴツゴツした拳が落とされる

「痛い！」

「痛く無かったら困る」

「そんなぁ・・・まぁ良いわ、いやいや全然よう無いけれど！

招待状付きはこれで全員ですかいな？」

「そうだな、これで全員だ」

「ふんふん・・・まぁ、今年は当たりやね、ほな、暫く屋台で遊んでからまたおいで。試合は後ちょっと時間かかるで」

「っつー事だ、健全に遊べよ」

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「お～い！」

確か俺には声を掛けられる女の子に心当たりは無かった筈だ、多分気のせいだろうと声を無視して焼鳥を頬張るバルトだったが、直後、死ぬ思いをすることになる

「あんたの事よ！この槍男！

「ゲグッ！」

効果音で表すならドガッでザグッ！だろうか
サラの流れるような飛び蹴りを後頭部にモロに受け、くわえていた焼鳥を喉に突き刺してしまったのである

「・・・ッ！」

急いで串を抜き、ポケットから薬草を出し、かみ砕いて喉に張り付けるバルト
彼は治癒魔法の類を扱う事が出来ないのであった

「何すんだよ馬鹿！」

当然の反応だが、サラの手には光が灯っていた
当然、サラも常識が無い訳では無いのだ。自分の犯した事を悔い、治癒魔法を準備していたのである
しかし、彼女が相手にしていたのはショウではなくバルトだ
ショウなら、何も言わなくともある程度の止血をしたら黙って治癒魔法を受ける程度には習慣化しているサラの攻撃だが、バルトの場合、サラの攻撃は未体験である

人としてバルトの様な反応は当たり前の事だが、育って来た過程が過程だけに、本気の怒りはサラは受けた事が極端に少なかった

結果

「〜っ、う、うぅ〜・・・」

泣き出してしまった

「え？俺が悪いの？え？」

最初から成り行きを見ていたならば、悪く無いと断言出来るのだが、バルトが蹴られる所を見てない者からすれば、え、何コイツマジ鬼畜じゃねぇ？と判断するのは間違いない

そして、一つ断言出来るのは幼なじみとは『お嫁さん』宣言等をしている可能性が高く、お互いが泣いていたり困ってたりするのを把握する感覚に長けているものである

つまり

「バルト・・・一応辞世の句位は詠ませてあげるよ」

ショウは騎士剣を最上段に構えてバルトの背後に立っていた

「待て、待っ」

「良し分かった、しっかり聞き遂げた」

「それ聞いてねぇ！」

ガキィ！

寸での所で槍で受け止める事には成功したが、槍とバルトの腕は悲鳴を上げていた

「化け物かよてめぇ！」

「そのまま舌を噛んで死ね・・・」

「嘘！まだ強くなんの！？」

いよいよバルトの命が危なくなった時、突然ショウの首根っこが掴まれ、引き離される

「・・・そこまで、ちゃんと話を聞くべき」

「あんまり面倒な性格だと作者が困るだろ」

「マテライト、作者って誰よ？」

「忘れた方が良い」

首根っこを掴み、引き離したのはマテライトで、間に割って入って来たのはトーマスとオウムだった

「・・・話を聞いてから、コイツを切るべき」

「離せマテライト、とりあえず切ってから話を聞く」

「面倒臭いのよ、後片付けが」

「すまないが、オウム、バインドをショウとそいつに掛けてやってくれ、腕が疲れた」

「ショウには掛けてあるわよ」

「嘘だろ！」

それからトーマスがショウの腹を蹴飛ばし、なんとか落ち着かせる事に成功し（その際ショウは縛られている）、話を聞くところまでこぎつけた

「要するに、アンタはこの子に何故か知らないが蹴飛ばされて怪我をしたからキレた訳ね」

「まあ、そんな所かな」

「で、何でサラちゃんは蹴飛ばした訳？」

「えっと・・・知ってる人がいなくて不安だったのにその人が無視するから・・・」

「成る程、じゃあ判断はショウに任せるわね」

「待て、死ぬ！確実に死ぬ！」

オウムが目で合図すると、いつの間にか起きて話を聞いていたショウの縄が解かれ、二人の前に立つ

「サラ、人を簡単に蹴飛ばしちゃいけないのが分かった？」

「うん・・・」

「なら良い、じゃあとりあえずバルトだけど、事情は置いといて、女の子を泣かせた責任を取ろうか」

「贔屓じゃないか！」

「・・・確かに、それは取るべき」

「事情はこの際無視だよな」

「バインドは解かないから好きにやれるわよ」

「待て、全体的におかしいだろ！」

『何処が？』

民主主義の悲しい所だが、少数派の意見は淘汰されるのが常である

「トーマス、新作はいくつある？」

「・・・二つ」

「それを使おう」

会議の結果、二つの薬がバルトの目の前に置かれる

「・・・選べ」

どちらも薬瓶は黒いので、中身の色は見えないが、匂いが危険度を物語っていた

右側の薬瓶だが、どこと無く甘い匂いをしている

無害の匂いに取れる、しかし罰に使われるだけあって油断は出来ない

対して左側の薬瓶だが

「何故だろう・・・目が開けられないよ、トーマス」

「・・・仕様」

「くそっ！目が閉じたいのに閉じれ無い！」

無臭だった、しかし目は問答無用で開ける事を許されなかった

「・・・さあ、どっち？」

「右側、右側で！」

即答だった

しかし、答えを聞いたトーマスは不敵に笑い、左側の薬瓶を懐にしまうと

「・・・中々勇気がある、新しい世界が見える筈」

と呟いた

「・・・因みに、甘い匂いだったが、左右で中身は一緒、匂い成分だけ中身が変わってて効果の安全は保証出来ない」

「待て、出来レースかよこの野郎！」

「トーマス、実験では左側はどんな反応があったんだ？」

「・・・鼠に使用した所、しばらく鼠は痙攣して・・・それ以上は恐ろしくて思い出したくない」

「良し、全部流し込むわよ」

「止めろ、マジ止めてくれ！」

最後の抵抗とばかりに、口を無理矢理閉じるバルトだったが、トーマスには抵抗は通用しなかった

「・・・しょうがない」

バルトを転がし、耳に向かって流し込み始めたのである

「口からじゃ無くて良いの？」

「・・・薬は擦り込んだり、傷口から染み込ませる方法もある、体内に行き渡るなら方法は問わない」

その時、バルトに変化が訪れた

鍛え抜かれた筋肉は萎み、痙攣を始め、髪の毛は伸び、ピンクに染まり、薬を流し込んだ耳は何故か耳たぶが若干脹れている

「・・・此処からの変化は、常人には見せられない」

トーマスが言い切る前に、オウムが魔法で何処かに飛ばしていたそうな

後日、酷く窶れた様子のバルトが外れの道で倒れかけていたのをアベル教諭が発見したとか

第十二話：・・・趣旨は？（後書き）

難産の上に納得出来なかったお話

武器を選ぶ時に守る為の剣、の理由は、前世に関わる設定があるので、暫く覚えていて下さい・・・二部で解決したりします

第十三話：開幕戦、白モヤシ（前書き）

更新速度が上がらない・・・スランプです

第十三話：開幕戦、白モヤシ

「サラ、満足してる？」

「うん、おいしいよ。それよりショウも一口どう？」

「有り難う、頂くよ」

二人はその会話をショウの膝の上で行っていた

会話は周りに駄々漏れ、嫉妬の視線が幾多も束になって二人を襲っていた

そんな二人の周囲に座るトーマス、オウム、マテライトの三人のみが二人を嫉妬するでもなく、ただ呆れた眼で見ていた

「ほんと、仲良き事は美しきかな、なのかしら」

「・・・度を弁えるべき」

「そんな事より前見ろよ、一回戦目が始まるぜ」

見れば、一回戦目に出場する選手の片方が勢いよく飛び出して来たところだった

何か刃の脇に斧の様な物が付いた槍を振り回している

困惑している俺達にカインさんの解説が入った

「あれは、ハルバードって言うんだ。元々重量で突き抜く槍の重量を上げ、更に砕く、切る、といった特殊な攻撃の出来る武器だな」

「おお！何て良いとこ取りな！」

「何簡単に考えてんのよ、ただでさえ重い槍を更に重くしたのよ、使い難いったらありゃしない」

「・・・後懐に入られたら徒手空拳、もしくは柄の打撃位しか攻撃方法が無い上に、ミドルレンジ～ややミドルレンジ位のクリティカル範囲を保つ必要もある」

「でもメリットもあるんじゃ無いか？刃の付け根を持って振り回して柄で打撃なら攻撃の速度を変えれるし」

ショウが意見を口にした瞬間、周囲に電撃が走った

『惚気じゃ無くなった！！？』

「そうか、お前ら首を差し出せ、皮一枚残して斬ってやる」

「ショウ、そんな事しちゃダメ！落ち着いて座りなさい」

「・・・ハイ」

「ははは、少なくとも“鷲”って事だな。そら、次の奴が出て来るぞ」

『ヒィィィィヤッホォウウウウウウウ！』

出て来たのは、俺達鷲の先輩で、やたらとテンションの高い白い頭の針金野郎だった

「あん？何を持ってるのよアイツは？」

「・・・あれは、戦太刀だ。普通の刀より重さも、長さもある」

「う？でも、何だか変な感じがするよ、ショウちゃん」

「どういう事だ？」

「ちょっとズボンに切れ目が入ってる。投げナイフとかだと大抵腰か太ももにああやって取り出しやすいように切れ目が入ってるんだよ？」

「なかなか鋭いじゃないか、ショウの彼女は。その娘の言った通り、アイツはナイフも使えるし、それだけじゃ無い」

「どういう事だ？」

「試合を見てれば分かるさ、もうすぐ魔法実況も入るぞ」

言われた通り、カインさんが促してから少し間を置いて、魔法実況が入った

『ア、ア、ア、アテンションプリーズ！んン、良し良し、それじゃ今から簡単な選手紹介・・・を省いてただくっちゃべるぜぇ！』

それで良いのか、実況係

『一回戦目から前大会の決勝戦の再現だぜ、コラァ！まぁ完全くじ引きの結果の対戦組み合わせだから気にすんな！』

「実はな、この二人のくじだけビミョーに細工しといたのよ」

「誰が？」

「俺が」

「空気読みなさいよ。多分無理っぽいけど」

『・・・前回同様、白もやしが勝つのかどうか見物だぁ！それじゃ、試合開始ぃぃぃぃ！』

◇　◇　◇

「手加減してぇなぁ、ワイちょっと怠いねん」

「抜かせ、てめぇが怠いのはいつもだろ」

「そんなん言わんでもえぇやん、言わんとったらバレへんだのに」

二人の間で戦太刀が、ハルバードが、硬質の轟音を立ててぶつかり合う

「いやん、太刀って直ぐに刃が潰れるデリケートな武器なんやで」

「じゃあ好都合だな」

「酷いなぁ」

言っている事は本当なのだろう、戦太刀の刃は目に見えて潰れていた

元々重量で叩き切る方法に特化した戦太刀を叩き潰すハルバードの質量がうかがえる光景だった

「しゃあないなぁ、少し離れてや」

切り合いの最中、器用に足を動かし、地面にいびつな丸を幾つか描き、そこを足で白もやしは踏み付けた

すると、対戦相手の足元に土の槍の壁が顔を見せ、一気に突き上がった

対戦相手が気を取られた一瞬の内に白もやしは戦太刀を後ろに放り投げ、何処からともなく無骨な大剣を取り出した

「成る程、土は終わりか」

「せやで～次は炎がいくでぇ～」

言葉通り、白もやしの足元からは炎が吹き上がる

大剣も朱く染まっていき、見た目からして高温をイメージさせる凶悪な物に変わっていった

「しょうがない、こっちもやるしか無いんだろ？」

「分かってるやん、頼むで～」

対戦相手の持ってるハルバードはクルクルと回転させられ、一回回る度に槍の先が氷に包まれていく

しばらくすると、ハルバードの刃の部分が氷に覆われ、柄の部分も薄く凍っている

「えぇの？水蒸気爆発ってのもあるんやで？」

挑発的な目で足元から炎を次々と吹き出させる白もやしはどこか満足そうだった

「はん、気付いてる癖によ」

「あっちゃっちゃ～、バレたら仕方ないなぁ！」

後頭部を掻き、首を回した後、白もやしは大剣を一振りし、炎の塊を撃ちだす

が、炎の塊は突然、何かに阻まれた様に消え去り、熱量すら対戦相手に届かなかった

「空気の壁ってホントやらしいなぁ・・・」

「うるせぇ、さっさと構えろよ」

「そないガツガツせんの、過労死すんで」

ガックリうなだれる白もやしを見て、対戦相手は氷のつぶてを飛ばしながら突っ込んでいく

が、片っ端から蒸発させられ、余り有効な攻撃とは言えない様だ

「さて、お試し期間やけど、もう終わりでええかいな」

「最初からマジでやれよ・・・ま、次は決勝だな」

「敗者復活かいな」

「勿論、デモンストレーションで負けるんだ、敗者トーナメント位勝ち上がってみせるさ」

「楽しみにしてるわ」

お互いに切り結んで距離をあける

先ほどの会話中も氷が、炎が飛び交う戦場であった事は確かだ

「最後や、お互い詠唱付きやで」

「しょうがないな・・・集いて踊れ、戦き歌え、氷の理辿るは蛟、氷結一閃！」

「華を飾れ、燃えて萌えよ、芽出ずるは炎よ育て、桜花散火！」

炎の桜と氷の蛟がぶつかり合い、そして魔法の消えた丁度良いタイミングで、わざわざ前へと槍を放して白もやしの対戦相手は倒れた

第１４話：トーナメント戦？（前書き）

すいません、こえ部に浮気してました、テヘッ☆

第１４話：トーナメント戦？

「釈然としないっすね・・・」

「何がだよ、ショウ」

「いや、何だかペチャクチャ喋ってたし、ナイフを掴んで木を丸々一本凍らせた馬鹿だぜ、本気があの程度なのかなってさ」

「そうね、私の目からしても最後の攻撃はお互いに詠唱無しでも同じ規模の攻撃が出来たと思うわ」

「・・・それに、武器の順番と使用方法が不自然」

「ふぇ？私にはわかんなかったよ？」

「・・・まぁ、この試合はデモンストレーションの味が強いからな、お前ら一年にバレてもしょうがないか」

『デモンストレーション？』

「八百長って意味だよ、それに、この試合からはガチだぜ」

『ウリィィィィッハァァァァ！さて、そろそろ次に行こうかぁ！キタキタキタキタキタァァァ！燃える格闘少女、ヒスイの登場だぁぁぁぁ！

彼女が右にっ！左にっ！ステップを切り相手を待っている！

さぁ、そんな彼女の相手は・・・おぉぅ、初出場、ランカスタァァァ！

資料によると、二年生の獅子組、鞭使いだそうです！

・・・応援してるぞ、是非ともヒスイちゃんの縛られる姿を、ちょ、先生、マイクを・・・

試合、開始！！』

何があったんだ、司会の人

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「ふ～ん、男って皆あんなのなのね」

「う～ん、否定仕切れ無いな、うん」

「そう、じゃあ燃やし尽くして不能にしてあげる」

「マジ勘弁、うん」

彼女は飛び上がり、仕込み針を投げ、飛び蹴りを放つが、針を全て薙ぎ払われ、鞭で足を受け止められる

「フンッ！」

鞭をそのまま蹴り込み、無理矢理に一撃を顔面に叩き込み、離脱の隙を作った

「けど、たったそれだけで逃げれると判断するのは早いんだな、うん」

のけ反りながらも手首をウネウネと動かし、バシッと鞭を鳴らすと、逃げようとする背後に氷の壁が出来ていた

「この・・・程度っ！」

ゴウッ！

『ヒャァァァッハァァァァ！キタキタキタキタ！ランカスタの正確無比な防御に堪らず逃げようとしたヒスイを阻んだ氷の壁ッ！

しかし、ヒスイちゃんもヒスイちゃんだぜ！俺のヒスイちゃんへの愛の百分の一しか無いとは言えヒスイちゃんは炎でドロッドロに熔かしやがった！』

「うん、そのどや顔、快感で塗り潰してあげよう」

「パス！危険棄権！」

空を切り裂く鞭の先端を脚で正確に蹴り潰し防御する

時々鞭の伸縮に合わせて炎塊が撃ち出されるが、それも氷の鞭に弾かれる

暫くの膠着状態に観客はヒートアップし、会場のボルテージに合わせランカスタとヒスイの動きも上がっていった

そしてその時は訪れた

「火鼠花火・燐！」

「飄々氷火！」

お互いが打ち合い、離れ際に放った最高速度の魔法

しかし、目的の違いが次のステップを踏む明暗を分けた

「鳳仙火！」

火鼠花火の通った道が光り、炎の蕾がランカスタを飲み込んだ

「マジ勘弁、あんた残念」

しかし、蕾に飲み込まれながらランカスタは二言呟く

そして、ヒスイの放った鳳仙花が凍り、ぱらぱら崩れ去った

「氷結」

ヒスイの足が間髪入れずに凍り付き、そして

「・・・チェックメイト」

喉元に氷の杭が襲い掛かる直前で止まったヒスイの姿があった

◇　◇　◇　◇　◇　◇

『第二試合ィィィ！先に入場してくるは・・・』

砂塵が起こり、ガンハンマーを担いでいる男が轟音を響かせ降ってきた

『筋・肉・馬鹿！ガンハンマー担いで障害物をぶち壊し、道を作って進む男、アイレイがやって来たァァァ！そのハンマーは残酷に火を噴くのかァァァ？続いて来るのは・・・』

砂塵を水がたたき落とす形で場を覆い隠し、風が水を吹き飛ばした時、一人の男が、サーベルを持ち、振り切った形で静止していた。

彼の目は細く、鷹のように尖っていて、これからの戦いに向けて集中していた。

『剣豪、ホークロードォォォォォォ！今大会で一番剣術に長けているこの男は、筋肉の塊の重戦車にどう立ち向かうのか！？それでは、しあ』

爆音が、鳴り響いた。

隣に居たカインさんが、魔法を会場全体に掛けたのがわかった。

・・・気付けば、会場に意識を保ったままの生徒は、目を真剣なものにし、武器を取り出していた。

そして彼らの全てが、招待状もちだった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

『さて、今年の招待状もちの生徒よ、ようこそ、”夜会”へ、緊急

のことでな、このタイミングでの挨拶となったが、私が、会長兼、学園町のクロウリー、一応、吸血鬼だ。

声のみとなって申し訳ないが、そうも言っておれん、ついさっき、学園近くに、ゲートが開いた。

魔物に襲われることの無いよう、外部へ魔力は漏らさないよう、結界を張ったが、視認されるとどうしようもないのでな、警戒をしておいてくれ。

教職員は、速やかに気絶、睡眠状態にある生徒を学園内に運び、門の警備に当たれ、新入生は、速やかに寮に戻り、寮の警備。他のメンバーは、寮を守るものと、遊撃班に別れよ、後白モヤシはサボるなよ。

必ず、生き残るように。』

第十五話：夜行軍（前書き）

修学旅行楽しかったぜ・・・

とりあえず今回は、ドラクエのスライムとカンダタ相手に先輩方をリスペクトする回

第十五話：夜行軍

「ふぅ、やっぱりもわっとするなぁ」

地面に開いた“門”から一匹の人影が飛び出した。

キョロキョロと周りを見渡すと困った様に溜息をつく。

「なんだ、場所が悪かったのか」

狼や異形の鳥など、戦闘力の残りカスの集まり程度の魔物しか居なかった。

その全てが人影に頭を垂れ、じっとしている。

「慣れてきたからようやくわかったが、結界が張ってあるじゃないか、クソッタレめ」

人影は後頭部をポリポリと掻く。

その仕草がどうにも人間臭かった。

「いやぁ、参った参った。じゃあ、そういう事で」

人影が足を踏み締めると波紋が地面を伝い、狼達は狂暴な目付きになり、並み居る魔物の群れから一匹の吸血鬼が顕れた。

“門”に向かい飛び込もうとする人影は最後に一言こう呟き、飛び込んでいった。

「キラージャックの見てる此処にちょっかいは掛けづらい」

人影には、矢が一本、背中の心臓の裏に刺さっていた。

顕れた吸血鬼は辺りに良く響く声で叫び、魔物達を四方八方にある程度の固まらせて進ませた。

「ＵＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！！！」

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「・・・ふむ、逃がしたかの」

学園長は弓矢の構えを解き、ふっと一息ついた。

ただ、悔しかった様で、水瓶の中の水には歯を食いしばった姿が写り込んでいた。

握り拳は今にも近くの壁を叩き壊しそうなくらい震えていて、余りにも強く握っているのか、真っ白になっている。

『ナンダヨ、ハズシタノカヨ』

何処からか頭にやたらと響く声が部屋を掻き乱した。

ムスッとした様子で学園長はベッドに倒れ込む。

「ま、下の世代の勉強と考えるなら良いかの」

『ヒヒヒ、マダソンナジジクサイトシジャネーダロ・・・』

「男女関係なく、歳の話は厳禁じゃぞい」

そして、落ち着いた寝息が聞こえてきた。

◇　◇　◇　◇　◇

「Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｏｎｅ　Ｂｉｔｅｓ　Ｔｈｅ　Ｄｕｓｔ♪」

鼻歌混じりで辺りの魔狼を切り捨てる白モヤシ。

しかし、その歌は被害者側の心境だっただろ、と周りの生徒は皆突っ込みを入れていた。

「おーい、俺はもうちょっと先に行くぞ！！」

そう声が聞こえた時には、白モヤシの頭の上を、風を切り裂いて飛

ぶ、白モヤシの姿があった。

「待てレスタット！俺も・・・」

慌てて地面に居た白モヤシは後を追おうと足から煙が出るが、出発は出来なかった。

「働け、白モヤシ」

カインだった。

「何すんねんサボり教師コラァ！」

「お前にだけは言われたかねーよサボり魔！」

「誰が悪魔じゃこのシケモクお化け！」

「良いから働け時代遅れ！」

『お前ら良いから働け！』

四方八方から、正確に二人に魔法が飛んできた。

「「危ねーなこの野郎共！！」」

自分が悪いことを棚に投げ付けてキレる二人。

しかし実力者である二人が本領を発揮するスイッチを、的確に入れたようだ。

◇　◇　◇　◇　◇

先程二人が投げ付けた責任は、哀れ棚ごと砕け散る事となった。

「元はと言えばこいつがサボるせいだ・・・」

「やかましいわ、アンタも相当サボっとった癖に・・・」

『伏せろ！絶対に顔をあげるな！』

「「てめぇの責任俺に押し付けんじゃねぇこのド低脳がァーーーー！！」」

お互いの身体から魔法陣が弾ける様に展開され、込められた魔力の余波で辺りの魔狼達は気絶していき、ゴブリンや、ドビーと呼ばれる蛮人族も、指揮官役として居たのだが、皆膝をついていた。

「「吹っ飛べカス野郎ォーーーーー！！」」

『山塊』　と呼ばれる土属性の魔法を放ったのは、カイン。

文字通り、山が塊となって相手を襲う、範囲の広い、所謂殲滅魔法だった。

対して白モヤシ・・・カイゼルと言う名前だが、こちらの放ったのは『雷雷美人』。

効果としては一点集中・・・の筈が、カイゼルの『雷雷美人』は目の前扇形に拡散を起こしていた。

結果、お互いの魔法がぶつかり合い、反応して魔力の塊になると、定型を取れず、崩壊。

つまるところ、爆発を起こしたのだ。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

一方その頃、森の奥へ進んだもう一人の白モヤシ、レスタットは、吸血鬼と対峙していた。

「で、確か吸血鬼ってのはドラキュラ伯爵のご子息様だっけか？」

「違ウな、私は造ラレタ方の吸血鬼、どちらカと言うと、死神に近イ存在かナ？」

「ふーん、まぁ、正直俺には関係ないんだが・・・」

「アンタ、此処で蒸発するかどっかに引きこもって誰も喰わないか選びな。」
「ふッ、笑わセるナ、何故貴様の様なガキノ言うことを聞かネばならん？」
「元々お前らはそんな感じだったな・・・じゃあ、逝け」
槍を構え、切っ先を吸血鬼に向ける。
「安心しろ、向けただけでなんでも貫くって馬鹿みたいな槍じゃない。多分、岩に傷がつくかつかないか、だな」
レスタットは更に続ける。
「ただ単に――魔法が流しやすいだけだな」
その言葉を聞いて、槍の切っ先から逃げる吸血鬼。
しかし既に回り込まれていて――

「ゼロ距離、滅多に無いよ」

魔法が、弾けた。

◇

◇

◇

◇

◇

◇

その頃、学生寮にて

「結構、討ち漏らしは来るな」

「そうだな、来るな」

「・・・けど、来ない」

武器を構えて立つ三人、敵の影は見えるのだが、何故か、こちらへ来ない。

ただ――オウムだけは、魔法を打ち続けているが。

「チッ！間に合わなかった！」

オウムの放った魔法が、ターゲットの吹き飛んだ後に炸裂し、地面を弾き飛ばしている。

「一矢必中」

次々と飛ぶ矢は、オウムの打つ最速の雷系魔法より速く飛ぶのだ。

今もなお――

「疾！！」

ケモノの悲鳴を同時に上げさせながら。

「こらー！私にも何匹かやらせろ！」

「いやん、だって遅いしぃー」

二人は会話をスルノダが、全く視線がぶれていない。

魔物を見ながら次々と攻撃を急所に目掛け放っているのだ。

「お前が早過ぎるんだよ！」

「そんな、早いとかえっちぃ～」

「キィ～！腹が立つ～！」

「一つ助言するなら、コイツとまともに張り合うな、もたないぞ」

「そんなツレナイ事言わないでよ～」

「黙れカマ野郎」

「・・・男？」

「残念ながら、な」

もう一人の上級生が現れ、自然に会話に参加する。
突然オウム達の後ろに現れたのがショウ達には見えていた。
「トゥルゥースの方は終わったの？」
「ああ、終わらせてきた」
しゃらん、と鈴の鳴る音がしてトゥルゥースの足元に陳が描かれる。
「お前がぶざまに遊んでる間にな」
「いやん、冷たい」
「黙れ」
音のならない何かがトゥルゥースの右腕から地面に伝わり
魔物の身体が不自然に欠け、息の根を止めた。
「島国の魔法なんて反則よ！反則！やり直しを求めるわ！」
「ハイハイ、とりあえず男として適切に行動しろ、お前は。」

夜行軍壊滅

「さて、最後だが、何か言い残した事はあるわけないよな、あんだけ人間ナメたんだ、もうちょっと頑張って欲しかったんだが、無理か、無理だよな、だってお前どうせ出来損ないだしよ。」

「・・・」

「ああ、良い、喋らなくて良い、なんか空気が汚れる上にお前の口を見るのが嫌だ。
嗚呼酷い、一番はずれくじだ、わざわざ奥まで切り込んで雑魚にちょっかい掛けて、時間を無駄にした。どうせならまともな魔法、幻術、妖術の中から何か一つくらい覚えてくれよ。初心者ダンジョンのボスじゃ無いんだから、な。」

チッ、と吐き捨てる様に舌打ちして爪先で足元の吸血鬼を踏みにじる。

その度に吸血鬼はビクンと跳ね、とごった目の中に白い髪の赤い目をした細身の少年の顔が入り込むのだ。

彼は爪先で傷口をえぐり出し、最後に近くの木を切り倒し、切り株に腰掛けた。

彼の赤い目は中々形容し難い色の不気味な月を映し、にへら、と口角を吊り上げた。

「・・・やっぱりお月様はくだらない此処と違って楽しそうだ！」

魔力抑制の枷を付けた彼の目には一体何が写っているのか？

ただ虫が鳴き、徐々に静けさを取り戻した森が彼を静かに見守っていた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

―その頃、先程の少年―レスタットと言うのだが―とそっくりな外見の少年は、少しけだるい表情を張り付けたカインと意地を張り合っていた。

「ええかげん負け、認めぇや、高さが足らんで、高さが」
「やかましい！人の獲物横取りした奴が何言ってんだよ、フラフラ寄って来やがって！」
「はぁ？どの口が偉そうに文句言えんねん！一々時間掛ける雑魚の癖に」
「うるせぇ、お前なんか一撃必殺か広範囲攻撃しかしねぇだろうが！」
「ハン、出来ない奴が悪いねん、魔力の少ない奴が！」
「規格外の化け物が何言ってんだよ！」
「規格外？ハッ、どうせ周りが勝手に決めた規格なら、俺達が全部ぶち壊したる！」
「思い上がるなよガキ、魔王でもなけりゃ勇者でも無いんだ、たかが分隊長クラスの魔力で付け上がるなよ」
「・・・あぁ、さっき規格外言うてたクソカスが何言うてんねん、ぼたくりこかすぞコラ」
「やってみればいいさ、年季と経験を見せてやる」
剣を構え、向き合う二人。
だが、どちらも動く事はなかった。

「・・・まあええ、年季と経験というやつも垣間見えたし、とりあえず帰る・・・わ」

「あん？何だよ今の間は？」

「関係あらへん・・・・お前ら先帰れや」

「何でよ」

「・・・いいから帰れ」

「チッ、思春期かよ」

無視でも決め込んでいるのか、それきり白モヤシは月を見上げて微動だにしなかった。

視線は月を捉え、髪はそわそわ動き背後に突き立てた剣にもたれかかり手を伸ばし、ぎゅっと握り締める。

しばらくそれを繰り返し周りから人影が消えると握り締める動きが止まり、代わりに悔しそうに顔を歪ませた。

「くそっ、何でやねん・・・」

地面に拳を叩き付け歯をきしませ顔に手をやり崩れ落ちた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「一つだけ言っておくが、この小説の主人公はあの白髪兄弟でもカインさんでもそこの魔法少女でもなく、俺だからな」

「ショウ、お前はいきなり何を言ってるんだ」

「・・・・誰かショウに治癒魔法を頼む」

「馬鹿につける魔法薬も治癒魔法もないからなトーマス」

「うるせえぞ全体的にボッコボッコにしてきやがって」

「いいじゃないかこのリア充が」

「筋肉デブだからモテないんだよ馬鹿」

「・・・全面的に同意、暑苦しいから近寄りたくない」

マテライトの肩には、袋の束が数十個引っ掛けられていた。

彼ら三人は今寮ではなく戦場に居た。

「お・・・大物じゃん」

戦闘で魔物、特に強い敵性を持った魔物を殺すと心臓部が魔力により凍結され、いびつな晶体が出来る。

これは学園の実習に使うので、学園は一定量を買い集めている。

しかし今回学園の周りで戦闘が起こったため、大量の晶体が精製された。

それを三人は「暇だったんだろ、行ってこいよ」とばかりに駆り出されたのだ。

もろ雑用だが、たまに嬉しい恩恵がある。それは

「・・・このタイプはショウ向け」

「確かになぁ、そいつは中途半端過ぎるし」

「俺には都合が良いんだよ！」

魔物の落とす、素材剣だ。

素材剣とは、名の示す通り、武器の強化の糧になる“物質”で、たいていは剣の形になるが、実際の所、不定形である。

武器を強化するには、相性の一致が条件で、相性が悪いと、強化は出来ない。

ただ、例外的に、無理矢理鍛治で熔かし、合成する、という方法もあるが、強化されにくい上に、“魔剣”になるデメリットが存在する。

強化されにくいというのは、簡単に言えばなまくらに成りやすいと言うことだ。

最悪、ただの鉄の棒に成り下がる。

また、魔剣になるということは、持ち主が処刑、もしくは魔物になるということを意味する。

代表例として、“ワイト”等だ。

また、周りに居る人間も時間差はあるが、かなりの確率で魔物に成る。

そのせいで処刑になるのだが、今までに数多くの人物が冤罪よって処刑された。

童話に名を残す“勇者”はほとんど原因が冤罪である。

彼らは魔剣を所持していたのではなく、強化の末にたどり着く“最終形態”を所持していたのだ。

最終形態と魔剣は対の存在だが、共通点がある。

とてつもなく強いのだ。

つまり、ショウ達大多数が素材剣を拾うのは、自分達の武器を強化するためなのだ。

「で、どうだ」

「チッ、また駄目さ」

「・・・でも不自然な形態変化されるよりは良い」

「そうだよな・・・マテライト辺り鎖付き鉄球に変化しそうだけど」

「オイコラ」

「・・・否定できない」

しばらく素材剣集めをしていて、二つ目の月が出て来た頃。

「ん？なんぞ？これ」

「・・・素材剣、ではないな」

「・・・どちらかというと、破片？」

「せやで、破片や」

「成る程、破片かぁ」

「じゃあ要らないな・・・熔かし尽くすか」

「・・・火遁は、得意」

「よし、じゃあトーマス頼んだ」

「待たんかいぃぃぃ！」

堪えれなかったらしい。白モヤシは自分で叫び声を上げた。

「俺、先輩！『けど変態』・・・否定、出来ん・・・」

がっくりうなだれ、そして間髪入れずに懐から袋を取り出し、目を魅せられた。

「辺り一帯を駆けずり回って集めた素材剣や、その破片と交換してぇな・・・な」

その目に、言葉に俺達はイイエを言えなくて、目を離さずに頷くしか出来なかった。

「ありがとさん～！マジ、おおきにな！」

走り去る白モヤシの足取りは軽く、また、重そうに不完全な髪飾りが後ろ髪に付いたまま、走り去って行った。

後になって思う、この時俺達、白モヤシを含めて世の中の不条理に縛られてるだけなんだと。

結局、抗うしかないんだと。

夜行軍壊滅（後書き）

二ヶ月・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8675s/

剣と魔法とやっぱり剣

2011年12月8日01時52分発行